
エヌ・オー G I F T

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヌ・オーGIFT

【Nコード】

N86290

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

この作品は実は新作ではなく処女作だったりします。反転・ゲーム・リバーズ・ゲーム・よりも更に以前に書いていた物です。

その為、色々な部分で不自然な展開がありますが御容赦ください。

プロローグ（前書き）

反転・遊戯・リバース・ゲーム - 6巻はまだ完成までに時間が掛かりそうなので代わりに載せてみることにしました。
お楽しみいただければ幸いです。

プロローグ

坂木勇玖の事情

時計の時刻が7時59分を越え、丁度8時になろうかという時間に合わせて俺の隣でいつも通りに共に待っていた季城由沙子の機嫌という針が斜めに傾き始めていた。

「遅いわね、あいつ」

あいつ——というのは俺達が待っている相手であり、俺達が居る目の前に建っている家に住んでいる日向正樹の事だ。

そして時計の針が本当に8時を誘うという5秒ほど前になって――

「ほら。兄さん急いで」

「ん」。分かつているって」

当の正樹と、その正樹を背後から押し出すようにして彼の妹である日向青空が玄関から出てきた。青空の方は正樹の背後に隠れてしまっている形になるので確認出来ないが正面に居る正樹はいかにも眠そうだ。

「おふあよ」

そのいかにも眠そうな顔で、且つかにも眠そうな声で俺と由沙子に朝の挨拶をする正樹。その正樹の声を受けて隣に立って沈黙していた由沙子の何かが切れた。

「正樹、あんた今何時だか分かつてるの？」

「ん？青空、何時なんだ？」

「え」と。8時・・・1分かな？」

時計を持っていない正樹に代わって青空が自分の腕に装着された腕時計を確認して答えた。そして、それが由沙子という女の我慢の限界だった。

「待ち合わせは8時でしょうが――！」

「やりすぎです由沙子さん！兄さんが死んだらどうしてくれるんですか！」

「こいつがこれくらいで死ぬ訳ないじゃない。それにちゃんと手加減しているわよ」

切れた由沙子に首を締められてグッタリした正樹に俺が肩を貸して歩く。由沙子は手加減したなどと言っているが普通に手加減をすれば自力で歩けなくなるほどのダメージがあるとは思えない。

「大丈夫？兄さん」

俺の反対側から正樹の体を支えている青空が心配そうに正樹の顔を覗き込み頬や額に手を当てて撫でる。

「まあ、いつもの事だしな。学校に付くまでには復活するだろ」

もっとも毎日同じ事をされているというのに毎日同じ事を繰り返す奴なので恐らく明日も同じ結果を生み出すだろうが。

「それ以前に私達は別に待ち合わせに遅刻した訳じゃない筈でしょう」

しかし当の青空は納得が行かないのか未だに憤慨を由沙子へと向けている。

「仮に遅れていたとしても一分くらいの筈。そんなに目くじら立てて怒る遅刻だとは思えません」

「五月蠅いわね」。正樹が私を待たせていると思うと一分一秒の遅れでもイライラするんだから仕方ないでしょう」

「そんな理屈で・・・！」

由沙子の適当な返答に更に由沙子に噛み付く青空。ここまでの経緯で分かると思うが青空は兄である正樹を過保護なまでに慕っている。少なくとも俺が少々面白くないと思うほどには。

学校に到着すると正樹の方もやっと自力で歩けるようになる位には回復してきたらしい。

「じゃ。後でな」

昇降口にまで辿り着くと『俺と由沙子』『正樹と青空』に別れてそれぞれの下駄箱がある場所へと向かう。俺と由沙子は2年の所へ。正樹と青空は1年の所へ。

断っておくが別に正樹と青空は双子という訳でもないし正樹が4月生まれで青空が3月生まれという訳でもない。正樹は普通に俺や由沙子と同じ年で青空は一つ下である。その正樹が何故1年の方へと向かうのかというと正樹は10歳の頃に長期的な入院をした事があり一級下の学年になっているのだ。そして、それ以来何故か青空と同じクラスという結果が続いている。

「鬱陶しいわね」

意識を自分の方に戻すと由沙子は自分の下駄箱を開けてウンザリした声を上げていた。由沙子の方に視線を向ければ下駄箱に大量に詰められた手紙の山。恐らくラブレターの類なのだろう。性格や言動を除けば由沙子は間違いなく学年一の美少女と言っているいい容姿を持っているのだから特に疑問に思う事でもない。

続いて俺も自分の下駄箱を開けると——ドサドサと由沙子に負けない量の手紙が溢れ出してきた。まあ、これも毎朝の事なので驚くに値しない。

「毎日、毎日良く飽きないわね」

由沙子は下駄箱に入っていた手紙を一瞥する事無くゴミ箱に放り投げ、俺もそれに習う。この量を一々読んでいたら日が暮れる。

「毎朝資源の無駄遣いを嘆きなくなるな」

そして一年の方の下駄箱からやはり大量の手紙を持った正樹と青空が現れる。

「そんなのさつさと捨てちゃってよ。兄さん」

言うまでもなく手紙は正樹宛——ではなく全て青空宛である。入学当初は学校一の美少女であった由沙子を学年一に貶めた少女は『

兄さんが駄目だつて言うから』の一言で交際を全て断り、以来毎朝正樹の下駄箱には青空宛の配達を頼む手紙が殺到するようになった。つまり、この4人の内3人までが学内で絶大な人気を誇り、成績や運動に置いて常にも常に上位をキープする中、正樹だけが一人並みの位置にいると言うのが現状だった。

「今度このゴミを使って焼きイモでも作ってみようかな」

「止めてよ。なんか変な味がしそう」

しかし正樹当人にそれを気にしている素振りは見られない。物心つく前からの付き合いの俺達の間には遠慮は無用という事もあるのだから正樹自身がそれほど深く考えていないのだろう。

「そういえば兄さん今日までの課題はちゃんと終わらせた？」

「古文だろ？バッチリだ」

「・・・英文翻訳だよ、兄さん」

「え？」

そして俺はそんなやり取りをする正樹と青空を見送って2年の教室へと向かった。

学校と言うのは退屈だ。

少なくとも俺にとっては学校の授業は予習復習をするほどの難易度があるとは思えないし、それは多分由沙子や青空にとっても同じ事なのだろう。

唯一正樹だけが学校の授業に対して予習復習に追われているが、正直俺には理解出来ない行動だ。学校の授業など授業中に教科書を眺めただけで理解出来るだろうに。

そんな退屈な授業が終わって昼休み。

「はい。兄さん」

「ん。ありがと」

いつものように4人で昼食を取る俺達は屋上に集まっていた。その俺の前で青空が手作りと思わしき弁当を正樹に手渡している。少なくとも日向家の家庭環境を考えると母親が作ったと言うのはまず

考えられないからだ。

「正樹の所の両親は相変わらず忙しいのか？」

「ああ。朝から晩まで仕事尽くめだよ」

俺は詳しい状況までは知らないが、そういう事らしい。まあ青空の手作り弁当は少し羨ましいとは思うが――。

「あれ？今日って青空の順番だったっけ？」

由沙子が取り出した弁当を見て少なくとも恵まれているとは思えなかった。

「なんですか？それ」

「何って母さんが作ったお弁当。正樹に渡しておけて」

「今日は間違いなく私の番です。そちらは手違いなので由沙子さんがお召し上がりください」

「私も朝確認したわよ。そうしたら今日は間違いなく自分の番だって」

正樹が青空に慕われているのは見ての通りだが実を言うと、もう一人正樹を気に入っている女が居る。

何を隠そう由沙子の実の母親だ。

「まあ良いわ。私は頼まれただけだしチャッチャと食べちゃって」

「あ、ああ」

明らかに一人前として十分な量を確保されている青空の弁当と、同じ量はあるだろう由沙子の母の弁当。その二つを前にして苦悩する正樹は気の毒だと思うが少なくとも可哀想だとは思わなかった。

放課後。

授業が終わると帰宅部である正樹、由沙子、青空は大抵一緒に帰る事になる。3人が部活をしていない理由はそれぞれに異なり、由沙子はただ『面倒だから』であり青空は『兄さんが入らないなら私も入らない』。そして肝心の正樹は――部活をするほどの余裕が無いからだ。

現在の正樹の成績はほとんど紙一重で平均を確保している状態で

あり学校が終わった後すぐに帰宅して予習復習を行わないと授業についていけないらしい。成績と言う面では4人の中でダントツに低い正樹だが不思議と赤点だけは取っていない奴だった。

そういう訳で部活をやっているのは4人の中で俺だけだ。

所属は剣道部。始めたきっかけは忘れてしまったが幼い頃からやっているので毎日の活動も特に苦にはならない。ただ最近俺の相手になるような強者が居ないので少々退屈だ。最近では練習よりも指導の時間の方が長いくらいかもしれない。

部活が終了し荷物を取りに教室へと向かう途中で少々予想外の奴を見かけた。

「帰ったんじゃないかったのか？」

正樹だった。

「忘れ物。これがないと明日の授業の勉強が出来ないんだよ」

そう言つて鞆を提示する正樹から良い匂いが漂ってくる。

「今日の晩飯はシチューか？」

「ん？ああ。青空が張り切つて作ってくれてるよ」

どうやら正解らしい。正直に言えば羨ましい限りなのだが実の兄である正樹に文句を言つても始まらない。

「どうせだから一緒に帰るか。ちよつと待つてくれよ。いま荷物を取つてくる」

「了解」

正樹の昇降口で待たせて教室に急ぎながら俺は自分の感情と思考をキチンと把握する。

俺は日向青空が好きだった。

自慢じゃないが思いを隠してなどと言うのは趣味じゃない。青空が高校入学してから直ぐに呼び出して告白は済ませてある。

結果は――1秒と待たずに玉砕である。

しかも返事が『他に好きな人が居る』とか『好きじゃないから』などなら俺の方に振り向かせる自信はあった。しかし青空の返事は――。

「兄さんの面倒を見なくちゃいけないから、か」

分かっていた事ではある。青空にとってそれは本心なのだろうが俺の観点からいうならば俺など『眼中にない』という事なのだろう。正樹が悪い訳ではないし青空と距離を置くほど明確な拒絶があった訳でもない。だから俺は今まで通り二人と付き合っている。

必要な物を鞆に詰め終えて教室を出る時ふと振り返って考えてしまふ。一体どうすれば青空は俺に振り向いてくれるのかという事を。自慢じゃないが容姿は勿論の事、成績、運動能力、その他様々な事に対して俺は正樹と一線を画くほど秀でている。それでも青空は正樹を選んだのだ。

一体後何をすれば俺は青空を手に入れる事が出来るのだろうか？

例えば青空が俺の妹だったならどうだろう？

「論外だな」

今の正樹を羨ましくは思うが代わりたいたいと思つた事はない。少なくとも兄と妹で結ばれる訳には行かないから。

なら正樹のように劣等生になるか？

「それこそ論外か」

そもそも俺は正樹が授業の何処についていけないのかすら理解出来ていない。それを実行するには俺はある意味優秀すぎた。

正樹と帰る帰り道。

ふと、ある事を思いついた。

今のままでは青空は振り向かない。そして正樹のようになるのは俺には不可能だ。なら方法は今の自分より更に上の存在になれば良い。もっと魅力的な男になって青空が俺を無視出来なくすれば良いのだ。その為には――。

「どうした？」

「いや。別に」

思考を切り替える。こんな事を考えても無駄だろう。

そもそも今生活する範囲内で今以上の能力があっても大して変わ

らない。金銭的に喩えるなら10億円あるのも100億円あるのも使いきれなければ変わらないという事だ。

この世界で使い切れない能力があるのに今以上になっても仕方がない。

だから、もしそんな能力が手に入れられるとしたら――。

「わ!」

正樹の声に意識を自分に引き戻す。何かと正樹の方へと視線を送ると蟻地獄のような光景が広がっていた。

何かを中心に発生した黒い渦は地面を螺旋に引き込んでいき、その渦に巻き込まれた正樹が中心へと飲み込まれていくところだった。「うわあああ――!」

悲鳴も虚しく流砂に飲み込まれるようにドンドン引きずり込まれていく正樹は黒い渦の中心へと飲み込まれていく。

黒い渦の中心――。

「ああ。なるほど」

それは俺が立っている真下だった。

何が起きているのか説明を求められても不明だ。しかし分かる事もある。この渦は多分俺を飲み込む為に発生した物だったのだ。だから正樹はただ巻き込まれただけ。

そして正樹には悪いが俺はこの渦に飲み込まれるのに抵抗しようとは思わなかった。これはきつと俺が成長する為に必要な事なのだ。だから俺は安心して身を任せ渦の中へと大人しく飲み込まれる事を選択した。

プロローグ（後書き）

注・この時点では分かりづらいかもかもしれませんが主人公は『日向正樹』です。

ちなみに名前の読み方ですが

『青空』 〓 『せそら』

『由沙子』 〓 『ゆさこ』

『勇玖』 〓 『ゆうく』

となっております。

第一章

俺は青空が嫌いだった。

理由はそれほど複雑なものではない。単純に要領が良く誰でも簡単に味方につけて誰からも可愛がられる青空が妬ましかったただだ。青空に愛情が向く分だけ俺から愛情が奪い取られている。そんな気がしたのかもしれない。

そんな俺の感情を理解していたのか青空の方もあまり俺には近寄らなかったし、勿論、俺からも近寄りはいなかった。

結果、益々俺から両親の愛情は離れていったが少なくとも俺はそれなりに満足していた気がする。

そんな俺と青空の関係が崩れたのは俺が10歳の時だった。

退屈な学校の授業が終わってからの帰り道、俺は通学路ではないが近道になる公園をショートカットして帰る途中だった。その公園の中に・青空が・居た。

正直な話をすれば俺は青空の事を過大評価しすぎていた。疎ましく思いながらも青空は何でも出来る奴、誰からも好かれる奴だと勝手に決め付けていた。

だから意外だった。

青空が3人の悪ガキに絡まれ泣いている姿というのは。

カルチャーショックといえば大げさと言われるかもしれないが俺からすればその光景はそれくらい衝撃的だったのだ。『あの』青空が誰かにイジメを受けるなど今の今まで想像もつかなかった出来事だ。

だから、その光景を見た時、俺は初めて自分の勘違いを自覚した。青空は確かに優秀で誰からも好かれると表しても間違いはないだろう。但し、そこにそれを妬む奴と言うのは含まれない。今までの

俺がそうだったように。

何故気付かなかったのだろうか？俺自身がそうなら一番に気付いても良かったのに——青空が愛されるのと同じくらい妬まれているという事に。

「やめる！」

そして気が付いたら俺は青空の前に立ち3人の悪ガキどもを精一杯睨み付けていた。正直、年齢からすればそれほど体格も良くないし迫力に欠けただろうが、その3人は青空と同年——つまり年下だったので何事かを呟いて俺を睨みながら去っていった。

それを確認して青空の方を振り返ると『何故』という文字を顔中に貼り付けた青空が俺を凝視していた。まあ今まで一番近くに居ながら無視していた奴が何を今更と思っているのかもしれないが——。

「帰るぞ」

俺がそう言つて手を差し伸べると、ちよつとだけ驚いたような顔をしてからオズオズと俺の方へと手を伸ばし——その目が見開かれて口が大きく開かれる。

俺が何事かと察するよりも早くガツン！と脳天から足元まで衝撃が走りぬけた。

気が付いたら俺は地面に倒れていた。

倒れて何故か赤く染まった視界で青空が再びイジメを受ける光景を見ていた。

『ああ。なるほど』と思う。つまりさっきの3人組は撤退した訳ではなく奇襲を掛けるチャンスを伺っていた訳か。

そして、その作戦は見事に成功して俺は倒れて青空はイジメを受け続ける。

「？」

いや何か変だ。確かに青空は先程と同じように泣いているが、その視線だけは一つの方角へと定められ必死に何かを叫んでいた。

その『何か』を理解した時、俺は丁度足元に転がっていた『それ』

を杖代わりに立ち上がっていた。そして、ゆっくりと歩み寄り俺から完全に注意を逸らしていた3人組の中で青空の腕を掴んでいる奴の『その腕』めがけて丁度杖代わりにしていた『それ』を勢いよく振り下ろした！

「ぎゃあああ——！」

公園に悲鳴が響き渡る。

まあ、それはそうだろう。10歳児の振り回したものとはいえ『金属バット』で腕を思い切り叩きつけられれば骨にヒビくらいは入る。

俺に腕に金属バットを叩きつけられたガキは涙目で這いずり回り状況を察して逃げた他の二人の後を追うようにヘコヘコと逃げた。

それを確認してからやっと俺は持っていた金属バットを放り投げて青空の方を再度振り返る。

「だいじょう・・・ぶ？」

「当たり前だ。俺はお前の『兄貴』なんだからな」

日向正樹は日向青空の兄である。俺が青空を助ける理由なんてそれだけで十分ではないか。

もつとも青空が俺を『兄さん』と叫び続けてくれなければ、そんな事にすら思い至らなかったかもしれない。

「ほら帰るぞ」

そして今度こそ俺は青空に手を差し伸べる。その手を――。

「うん」

今度は迷わず握り返してくれた。

手を繋いで帰り道を歩きながら俺はこれが生まれて初めてする兄妹らしいことかもしれないと気付く。

これからはもうちょっと兄貴らしい事をしていこうと思った。例

えば青空をイジめる奴らから守る——とか。

そんなちよつと浮かれ気味の思考をしながら家路へと帰宅して――。

「あ。お母さん」

玄関前に母親の姿を確認すると青空は俺の手を離して母親の元へと駆け出した。少々手が寂しいと思ったが直ぐに気を取り直して俺も母親の元へと出向き――。

パン！という音と共に思考が停止する。

何が起こったのか分からなかった。ただ俺の体は宙を舞い、そのまま塀へと叩きつけられて――動けなくなった。

そして意識が閉じる俺が最後に見たのは――再び泣きじゃくり俺に縋り付く妹の姿だった。

目を覚ましたら冬だった。

俺が目覚めたのは病院のベッドの上。そして信じ難い事に俺は6ヶ月以上も眠り続けていたと言うのだ。

正直混乱した。物凄く混乱した。混乱しながらも状況は頭に入ってくる。

俺が半年も眠り続けている間に起こった事。色々あるが一番の变化は――青空と母親の関係が完全に壊れていた。

俺が半年間も眠り続ける事になった直接的な原因は俺を背後から『金属バット』で殴りつけた悪ガキだ。あの時落ちていたバットはあのガキ達が俺を殴った後の物だったらしい。

そして腕にヒビを入れたガキの母親から俺の母親へと連絡が行き――結果としてトドメを刺したのは母親という事になった。

しかし青空はそんな事情など受け入れなかった。とにかく徹底的に母親を責め立てて最終的に青空は母親を完全に『居ない』物として扱う選択をした。

だから俺が目覚めた事に一番喜んだのは皮肉にも母親だったのかもしれない。俺が目覚ませば青空との関係も修復されると期

待を抱き——当然の如く裏切られた。

目を覚ましたと言っても俺は半年以上も眠り続けていた訳で退院する為には検査とリハビリが必要になる。幸い検査では異常は発見されなかったがリハビリの為の入院は続き青空は毎日俺の元へ見舞いに来る。しかし母親は俺の見舞いに来る事さえ青空に許可されなかった。断絶は継続を選択され以降何年にも渡って青空と母親の確執は続いて行く事になった。

最初に根をあげたのは母親の方。青空の無言の圧力に耐えかねて外へ働きに出ると言う口実で逃げ出した。

以来、日向家では殆ど俺と青空で過ごす事になり学校でも一学年遅れた俺は青空と同じクラスになり殆どの時間を青空と共に過ごす事になった。

それが日向正樹と日向青空の関係だった。

目を覚ますとかび臭い匂いのする薄暗い部屋の中だった。

「よお。目が覚めたか？」

「勇玖？」

そして同じ部屋に坂木勇玖も居て俺をますます混乱させた。

「落ち着け。順々に事情を説明してやるから、とにかく落ち着け」

「あ、ああ。頼むよ」

勇玖に宥められ兎に角、俺は落ち着く為に深呼吸を繰り返す。そのお陰か少しだけ混乱が収まってきた。

「さて。事情を説明する前に……何処まで覚えている？」

「何処までって……」

俺は先程まで昔の夢を見ていた気がする。しかし勇玖が言っているのはその事ではないだろう。現実起きた最後の光景は——。

「あ！なんか変な穴に引きずり込まれて……」

それから——どうなったんだろう？

「そこまで覚えているなら話は早い。とにかく俺達はあの黒い穴に飲み込まれた後、何処かの中庭らしき場所に落ちた。そこで……まあ信じられないかもしれないが鎧で武装された兵士に囲まれてな結果この地下牢に放り込まれた」

「えっと」

「ああ。混乱するな。混乱するな。俺だってまだ正確に事情を把握してないんだ。混乱するのは話を全部聞いた後にしろ」

納得は行かないが勇玖の言う事にも一理ある。なので俺は疑問は挟まずに頷く事にした。

「よし。それじゃ話を戻すが、どうやらここは俺達が今まで住んでいた場所とは世界その物が異なっている可能性がある。別に根拠も無く言っている訳じゃないぞ？鎧と剣で武装した兵士だけって言うなら過去にタイムスリップしたとも考えたが、それを見ても」

そう言って勇玖が指差したのは部屋（牢）の中の唯一の光源。

「一見ただのランプにしか見えないが良く見てみるとこの光は火でもライトでもない。光そのものがガラスの中に入ってるんだ。少なくとも科学の産物ではないことは間違いない」

「科学じゃないって事は……」

「確信は無いが魔法の類って奴だろう。俺達の世界を幾ら過去に遡っても、そんな物があると言う歴史は聞いた事がない。なら、ここは俺達の居た世界とは異なる世界だ。少々強引かもしれないが俺はそう結論付けた」

確かに強引だ。しかし言われてみるとそれ以外に結論はない気がする。何より優秀な勇玖が出した結論だ。恐らく間違っていないのだろう。

「まあ状況はなんとなく分かった……気がする。それで、これからどうするんだ？」

「さてな？俺にも鍵開けのスキルはないし状況が変わるまでじっとしているしかないだろ」

「あつそ」

俺はガツクリして壁に背を預けて寄りかかった。

状況が変化したのは俺が目を覚まして2時間ほど経った後だ。俺は3時間近く眠っていたらしいので勇玖は実質5時間も閉じ込められている計算になる。

「どちらか片方に尋問を行う。尋問を受ける方がそれを付けて牢から出る」

唐突にやってきた兵士は勇玖の言うとおり本当に鎧で武装している。そして俺達の元へ一つの手錠を投げ入れた。俺と勇玖はしばしアイコンタクトを行い――。

「俺が行こう」

まあ当然の結果として適任の勇玖に任せる事にした。だが――。

「駄目だ。お前は残ってそっちの奴を尋問する事にする」

「何故？」

「尋問の役割を押し付けあうなら適当につれて来いと言われたが率先して尋問を選択する奴が居るならもう片方を連れて来いと言われている」

つまり率先して自分から尋問を受けたがる奴は何かを算段を立てているかもしれないので、そういう奴は連れて来ると言われていいらしい。つまり要するに――。

「俺かよ」

「任せたぞ。正樹」

自分の思惑が外れたと言うのに勇玖は酷く楽観的だ。俺は渋々自分の手に手錠をつけて牢を出て兵士に付いて行く事になった。

兵士の後に付いて長い通路を延々と進み何処をどう歩いたのかも分からなくなった頃、俺は一つの扉の前に立たされ、その中へと押し込まれるように入っていった。

「来たか」

そして、その部屋で待っていたのは意外といえば意外にも一人の

女性だった。

一言で言い表すならば『女侍』とでも言えば良いのだろうか？長い黒髪を後ろで結いつけた和服に袴姿。更に腰の辺りには日本刀と思わしき刀が差されている。そして、何よりも――。

「どうした？さっさと座れ」

「あ。はい」

綺麗な人だった。

俺は毎日由沙子や青空を見ていたので綺麗な女性と言うのにはそれなりに耐性が着いていると思っていたが、目の前にいるこの人は綺麗な種類が違った。何がどう違うのかなど説明出来ないが兎に角、俺はその人に見惚れて呆然と佇んでしまった。

「色々説明する前に一応自己紹介をさせて貰おう。私は流花くりゅうか>という」

流花――そうか、この人は流花さんというのか。

「おい。聞いているか？」

「は、はい！俺は、その、日向正樹です」

「ふむ。まあ兎も角、色々聞かせて貰うぞ」

「は、はい！」

兎に角、流花さんの容姿に骨抜けにされた俺はペラペラペラペラいない事まで包み隠さず全てを話してしまった。

「ほお。異世界からか。普段ならそんな話は一笑に付するところだが・・・」

ちらりと俺を見て嘆息する流花さん。

「少なくとも、お前のような奴に機転を効かせる等という芸当が出来るとは思えん。信じがたい話だが少なくともお前は嘘を吐いていない事だけは確かだろう」

「そ、それはどうも」

「別に褒めていない。お前が嘘を吐けるほど器用な奴には見えないと言ったのだ」

まあ確かにそれはその通り。俺が今しゃべった内容には嘘偽りの一つも混ざっていない。

「あ、でも・・・」

「その勇玖とかいう奴がそれを見越して先にお前に嘘の情報を流しておくと言っ意見か？それも考えたが可能性は薄いな。それをしてもお前達になんら利益があるとも思えん」

俺が思い付いた意見など、とつくに考慮済みだったらしい。

「兎に角、今の話を信じるならばお前達は異世界からのお客様だ。いつまでも牢に閉じ込めておく訳にも行くまい。監視付きだが解放を約束しよう」

「あ、ありがとうございます」

彼女としては当然の結論を口にしただけかもしれないが俺は兎に角彼女に感謝しまくってしまった。

勇玖と共に牢から釈放された俺は親切にも流花さんに城——だった——の中を案内して貰っていた。

「まあ簡潔だが案内はこんなものだろう」

そして最後に俺達が出現したと言う中庭に出て締めとなる。ちなみ帰れない俺達には特別に城の中の一部屋を用意して貰った。俺はそれだけで流花さんに感謝しまくりだったのだが——。

「案外、無用心なものだな」

中庭をウロウロしていた勇玖は草むらに手を突っ込むと一振りの剣を拾い上げていた。

「真剣を持ったのは初めてだが、なかなか手に馴染む」

ヒュッヒュッと剣を振る勇玖は何か苦笑交じりで俺——の隣に立つ流花さんを見据える。

「初めて見た時から思っていたが、あんた強そうだな。一手、手合わせ願いたい」

「ゆ、勇玖？」

剣を正眼に構える勇玖を見た時、流石に俺は焦りを感じる。勇玖

が何を考えているのか知らないが真剣などで打ち合ったら——死ぬかもしれないじゃないか！

「やれやれ。正樹と違って随分好戦的な男だ」

それに対して流花さんは肩を竦めただけ。俺一人が焦っている最中、話は勝手に進んでいき——。

「刀を抜かないのか？」

「心配されなくても必要と感じればいつでも抜かせて貰う」

勇玖の目が細まったと思った瞬間、勇玖が猛烈な踏み込みで流花さんとの間合いを詰め真剣を真上から振り下ろす——。

「げほ！」

と思われたが気が付いたら勇玖が背中から地面に叩きつけられていた。

「踏み込みはなかなかの物だが真剣を持つのは少々早すぎたな」

どうやら流花さんが勇玖を投げ飛ばしたらしい。

「ゲホ。ゲホ」

まともに背中から落とされた勇玖は何度も咳き込んでいたが、その目には楽しそうな極上の玩具を手に入れた子供のような輝きがあり——。

「か、格好良い」

俺の目には流花さんが羨望の対象へと変化する。

こうして、この日勇玖は高みへの目標を見つけ日向正樹は憧れの対象を見つけた。

あの日以来、勇玖は城の騎士団の連中と良くつるむようになり——。

「お前も飽きない奴だな」

俺はあの日以来流花さんに付き纏っていた。

理由付けは単純に『剣を教えてください』と言うものだ。自慢じ

やないが昔は少々俺も剣道をかじった事がある。まあ後から始めた勇玖に3日で追い抜かれて止めてしまったが。

兎に角それを口実にして俺は毎日流花さんに付き纏っていた。

「お願いします！この通り」

そして俺は毎日毎日流花さんに頭を下げて頼んでいるが――。

「いい加減にしろ。私は誰にも剣を教える気はない」

彼女の答えはいつもNOだった。まあ正直な話をすればそれは分かりきった事で別に本気で剣を教えて貰いたい訳ではない。唯単に俺は流花さんに付き纏える口実が欲しかっただけだ。

なのに、これ見よがしに木刀で素振りなどをしていると――。

「違うと言っているだろうが！どうしてお前は何度も何度も同じ事を……」

必ず口を挟んでくるのだから彼女の面倒見の良さもかなりのものだ。

「まったく。明日には厄介や奴が帰って来るというのに何故こんな面倒な事を私が」

「厄介な奴？」

面倒な事という言葉は聞き逃して流花さんが漏らした言葉を聞き返す。

「言っていないかったか？私の雇い主だ」

流花さんに雇い主がいたというのは初耳だ。しかし彼女ほどの人なら引つ張りだこでもおかしくはないだろう。

「そいつが兎に角、厄介な奴でな。悪い奴ではないんだが悪ふざけが過ぎると言うか暇つぶしに命を掛ける様な奴でな」

「は、はあ」

なんか想像がつかなかった。

そして翌日。

俺はいつも通り流花さんに付き纏って木刀を振り回し注意を受けていたのだが昨日の流花さんの言葉通り『厄介な人』がやってきて

しまった。

「あら。流花さんが人に剣を教えるなんて珍しい事もあるものですね」

正直その人を一目見て思考が停止してしまった。

由沙子、青空、流花さんを種類は違えどAランクと称するならば、その人は間違いなくSSランクをつけられるくらいの美女だった。なんと言うか美しさの次元が違うと言うかなんと言え方がいいのだろう？

スラリとした銀髪に同じ色の瞳。それでいてこれしかないと言う絶妙なバランスの整った顔立ちに抜群のスタイル。

「エリナ。帰ったのか」

「はい。只今戻りました」

そして、にっこりと微笑むその人。

それが俺とこの国の皇女、エリナ「エル」クライリンクの出会いであつた。

「まあ異世界から。それは面白そう・・・じゃなくて大変でしたね」
「は、はあ」

時間があると言うエリナさんを交え俺の自己紹介などをしていたのだが話を聞いたエリナさんの第一声がそれだった。

「それで何故流花さんに剣を？」

「え？あ、それは流花さんが、その、凄かったから」

「ふむふむ。つまり正樹さんは剣を使えるようになりたい訳ですか？」

「え？いや、その、別に」

「ほお。別に使えるようにもなりたくない剣を毎日毎日私に頭を下げて頼んでいた訳か？」

「あ！いや、その・・・覚えたいです！是非！」

エリナさんの問いに思わず本音で答えてしまった俺は慌てて訂正して肯定を強調する。

「なら私がご指南しましょうか？」

「はい？」

「私も流花さんほどではありませんが少々剣の使い方方は理解しているつもりなので。良ければご指南させて頂こうかと」

「え？ いや、俺は・・・」

流花さんに付き纏えるなら別に剣なんか教えて貰わなくても――。

「良かったではないか正樹。こう見えてもエリナは教える事に関しては超一流だぞ。こんな機会は恐らく二度とない。是非教えて貰え」

「え？ ちょ、ちよつと流花さん・・・」

「では早速明日から始める事にしましょう。そうと決まったら早速準備に取り掛からないと」

「ちょ、ちよつと待つてくださいエリナさん？」

エリナさんは俺の言葉など聞かずいそいそと城へと入っていき残された俺に流花さんは――。

「頑張れよ」

「あ」

やっと流花さんが俺にエリナさんを押し付けたのだと理解した。

流花さんの言葉は翌日には身を持って思い知る事になる。

張り切って俺に剣を享受するエリナさんは兎に角――。

「ぜはあ！ ぜはあ！ ぜはあ！」

手加減を知らない。

「頑張ってください正樹さん。後たつたの250周ですよ」

何でだ？ 確か最初は城の周りを10周とか言っていた筈なのに何で25倍になってるんだ？

「ほらほら。急がないとまた周回数を増やしちやいますよ」

結局、初日だと言うのに手加減してくれなかったエリナさんによって俺は気を失ってぶっ倒れるまで城の周りを走り続けた。

あれから約一ヶ月。

エリナさんの超スパルタの特訓に何故死ななかったのかと疑問にしか思えない期間が過ぎ去って、なのに自分の一体何処が変わったのかさっぱり分からない俺なのだが――。

「良いですか？ちゃんと正樹さん用のメニューを作っておきましたからサボらないでくださいね」

「は、はあ」

エリナさんが一週間ほど用事で城を出る事になった。

それは良いのだがエリナさんが俺用に用意したメニューは――何気に行ったら死ぬんじゃないだろうか？と思えるような内容だった。

「それじゃ行ってきますけど、くれぐれも、くれぐれもサボらないでくださいね」

「わ、分かりました」

エリナさんはしつこいくらい念を押して名残惜しそうに出かけていった。

「正樹、暇か？」

「もし俺が暇そうに見えるんだったから流花さんは眼科に行った方が良いと思います」

エリナさんが外出中とはいえ特訓メニューは残されている為に俺はゲッソリとやつれる位に疲れていた。

「私は暇だ。だから付き合え」

しかし流花さんは俺の事情などお構いなしに持っていた木刀を俺の方へと投げてきた。

「あ、あの・・・」

「エリナの特訓を受け初めて一ヶ月。どの位成長したのか見てやる」
そして流花さんの手にも一振りの木刀。

「ちょ！待って・・・」

「問答無用！」

本当に問答無用で打ちかかってきた流花さんの一撃を俺はかろうじで持っていた木刀で受ける。

「ほお。手加減したとはいえ少しは反応出来るようになった様だな」

「偶然。偶然ですから、ちよつと待って」

「そう言つて本当に待つてくれる敵など存在しない！」

そのまま俺は手加減してくれた流花さんと暫く木刀で打ち合っていた。

その過程で分かった事なのだが本当に流花さんは剣の達人なのだと言つ事を理解する。俺が素人だという事を含めても流花さんの剣は流れるように美しく、そして、これ以上無い位に優雅だった。

「ほお。これは・・・エリナの奴に怒られてしまうな」

暫く打ち合った後に流花さんが不意にポツリとこぼした。

「しかしエリナには悪いがこれはこれでなかなか面白い。まだまだ行くぞ！」

「ちよ！だから何がなんだか分かりませんって！」

結局その日はエリナさんの特訓メニューに加えて流花さんの特別訓練が加わってしまったので事情を聞くのは後日という事になった。

「つまり一ヶ月の間にエリナがお前に課したメニューはお前の剣士としての土台を作るものだったのだ。エリナの奴が調整しただけあって柔軟にどのような剣でも組み立てられるようにしっかりとした土台を作られている」

結局、流花さんから事情を聞いたのはエリナさんが帰ってくる前日になってからの事だった。

「初日に私がエリナに怒られると言つたのは私と剣を打ち合う事でエリナが作り上げた土台に私の剣が入力されてしまったからだ。おまえ自身は気付いていないかもしれないが、何、なかなか楽しいものだぞ」

「え、えゝと・・・」

それはつまりエリナさんが苦勞して作り上げた基礎に流花さんが土足で自分の色を着けてしまったと言う事だろうか？

「まあエリナがこれほど熱心にお前を育てているとは思っていないかったからな。しかし土台の出来上がっただけの真っ白な奴に教え込む事がこれほど楽しいとは、いや本当にエリナの奴には悪い事をしたものだ」

そう言いつつもクツクツと笑う流花さん。いや楽しそうだけど何気にそれは洒落になっていないのではないだろうか？何と言っても相手はあのエリナさんだ。

「だ、大丈夫なんですか？その・・・エリナさんを怒らせるような事をしてしまつて」

「何、心配するな。エリナの奴は熱しやすく冷めやすい。お前を私に横取りされたと知れたらまた違う事を探すだけさ」

「はあ」

なんとなく『お前を私に横取り・・・』というフレーズにちよつとドキドキした。

「なるほど」

しかし流花さんの予想とは違つて歸つてきたエリナさんの反応は非常に不機嫌そのものだつた。

「ま、待つてください！今回の事は流花さんが悪い訳ではなく俺が・・・」

「そうですね。それじゃ責任は正樹さんに取つて貰う事にしましよ
う」

「・・・え？」

だから思わず流花さんを庇つてしまったのだが何故か簡単に矛先が俺の方へ向いてしまつた。

「え？え？」

「それじゃ、早速始めましょう」

「え？え？え？」

訳も分からず俺はエリナさんに引きずられていった。

心身共に疲れ果て、もはや指先一つ動かせなくなるまでエリナさんの超スパルタ指導は続いた。

「今日のところはこの位にしておきましょう」

そして何故か俺をしごいている内に機嫌の直ったエリナさんは俺の為に水を汲みに行ってくれた。

「やれやれ。お前が余計な口を挟まなければもう少し穏便に解決出来たのだがな」

そしてエリナさんと入れ替わるようにして流花さんが現れる。

「しかしエリナの奴、今回は随分と熱心だな。私に横取りされて冷めると思っていたが以前より更に熱が入っている」

「あの。俺動けないんですけど」

「見れば分かる」

「助けてくれたりとかは・・・」

「そんな事をしたら私がエリナに怒られてしまう」

「そ、そうですか」

結局それから更に一ヶ月。

俺はエリナさんの指導の元、剣を習う事になった。

第二章

「良いですか。その光を維持し続けるんですよ」

「は、はい」

俺はエリナさんに教わったとおり、手の中に発生させた魔術で作り上げた光を必死に集中して維持していた。

本来ならエリナさんからは剣だけを習っていた筈なのだが、いつの間にか魔術も習う事になっていた。

魔術の基礎理論から始まり魔力の変動と操作法。その他諸々を習い今では両の手の平の間に光を作り上げるところまで達成している。

「それでは、この砂時計が全て落ちるまで光を維持してください」

「は、はい・・・って、その砂時計ですか!？」

「何か問題でも？」

「い、いえ、何も」

エリナさんがひっくり返した砂時計は馬鹿でかく5時間くらいは平気で砂を落とし続ける物だと知っている。光を維持し続けるだけでも大変なのに、それを5時間も——俺は今日が自分の命日である事を覚悟した。

「ぐ。くくく・・・」

兎に角、光が消えないように必死に集中して維持し続け、かなりの時間を頑張った後、ふと残り時間が気になって砂時計に視線を向けると——。

「エ、エリナさん! 砂時計! 砂時計横になってる!」

「あら? 本当ですね」

いつの間にか倒れていた砂時計をエリナさんが立てる。

「え? そっちが上でしたっけ?」

「はい。間違いなくこっちが上です」

「そ、そう、ですか」

俺は何度か砂時計に目を向けていたので少なくとも半分は超えていた事は確認している。なのにエリナさんが立てた砂時計は上の砂の方が明らかに多かった。残りは後1時間くらいだと思っていたのだが後4時間は掛かりそうだった。

「正樹さん。光が弱まっていますよ」

「ぐぐぐ」

俺はヤケクソになって集中して光を維持する事にした。

最近のエリナさんは以前よりも更に意地悪になってきた気がする。毎日毎日、超スパルタの特訓を繰り返し一日が終わると動けなくなるくらいの厳しい特訓&意地悪だ。

それでも俺は一日の終わりには日課として剣の演舞のようなものをする事になっている。体も心も疲れ切っていたが、これをするとなんとなく心が落ち着くから。

「まあ大分マシになってきたな」

それに流花さんが付き添ってくれるのが嬉しかったから。

「しかし何故エリナの奴がお前に過酷な条件を突付けるのか原因を少しは考えた方が良いと思うがな。素直なのは良いが、このままだと近い内に本気で死ぬぞ」

「原因？」

エリナさんが俺に過酷な特訓を強いる原因？

「そういえば何でなんでしょうね？」

「はあ。これだからお前は二ブチンだと言われるんだ」

流花さんは肩を竦め呆れた声を上げる。

「それより最後の締めいつものをやりましょう、いつもの」
「やれやれ」

流花さんは嘆息しながらも立ち上がり木刀を手取る。最近一日の終わりにはこうして流花さんと模擬戦を行うのが習慣になっている。まだ一度も勝てた事はないが、なんとなくこれは楽しい気がした。

一日の労働を終えると俺は城の中に宛がわれた部屋へと帰宅する。この部屋は二人部屋で俺と勇玖が一緒に住んでいたのだが最近俺の方が疲れきっていて部屋に戻るとベッドに倒れるように眠る事になる。

「なあ正樹」

だから最近はいつもそんな感じなので勇玖が話し掛けてきたのは意外だった。

「ん？」

「少し話があるんだが今ちよつと時間良いか？」

「ん」。悪いけど疲れているんだ。明日にしてくれ」

「・・・そうか」

この翌日から勇玖が騎士団に混じってサバイバルキャンプと言う過酷な訓練に参加するのだと知ったのは数日後の事だ。

そうと知っていればもう少し話を聞いて置けば良かった。

「サバイバルキャンプ？ああ確か騎士団で実施されている最終訓練の事だな」

流花さんに相談するとそんな答えが返ってきた。

「私は参加した事がないので内容までは知らないが相当過酷な訓練らしいな。騎士候補者の中でもこの訓練に参加して帰還する者は3割を切ると言う話だ」

「3割って残りの7割はどうなるんですか？」

「さて？詳しい事は知らないが逃げだすか脱退を言い渡されるか、

もしくは・・・」

「もしくは？」

「死んで終わりか、だ」

ぐつと息が詰まる。それほど過酷な訓練に参加すると知っていれば少しくらい無理をしても話を聞いて置けばよかったかもしれない。

「勇玖、大丈夫かな？」

「何だ、勇玖の奴がサバイバルキャンプに参加しているのか？」

「ええ。俺も今日知ったばかりなんですけど」

勇玖がこの2、3日姿を見せないから心配になって騎士団の方に問い合わせて初めて知った事実だ。

「ふうむ。一般人を参加させるような内容の訓練ではない筈なのが本人が志願したか、もしくは強い推薦があつたか。どちらにしろ参加は自由意志によるものだ。お前が気にする事ではないだろう」

「そうですね」

そう言われても気にはなるが俺の方は俺の方で予定がエリナさんによって詰まっている。

サバイバルキャンプが一ヶ月以上も続く訓練だという事を知ったのはまた後日の話だ。

相変わらず日中はエリナさんの過酷なスパルタ授業を受け、それが終わると流花さんとの簡単な模擬戦をして一日の締めとする日常が続いている。

「そういえばお前に一つ言っておく事がある」

その流花さんとの模擬戦が終了した後に流花さんから一つの忠告があつた。

「自覚はないかもしれないがエリナの授業を受け私と模擬戦を繰り返した結果、お前の剣の腕は恐らく勇玖と同レベルくらいまで上がっていると思つて良い」

「勇玖と？」

「あくまで剣の腕はと言う話だ。恐らく本当に戦えば実戦を知らないお前は勇玖の足元にも及ばないだろう」

「まあ、そうですよね」

それは、ある意味簡単に予想出来る結果だ。むしろ剣の腕だけとはいえ勇玖に追いつけたのはエリナさんの過酷な授業と流花さんの指導のお陰だろう。

「まあ要するに何が言いたいのかというと、お前は戦うなという事だ」

「え、えーと？」

「これから先、何が起こるか分からん。ひよつとするとお前が剣を振る必要が出てくるかもしれん。だが、そんな場面になってもお前は剣を振らずに逃げろ。願わくば一生人を斬るような事が無い方がよい」

人を斬る。今まで全然考えてこなかったが確かに剣というのは元々そういう目的で修得するのが普通だ。俺の目的は違うがひよつとしたらそんな場面が来るかもしれない。それでも流花さんは俺に人を斬るなど言ってくれているのだ。

「だが・・・」

そして――。

「いざとなったら躊躇うな」

その事実よりも俺の命の方が大事だとこの人は言ってくれたのだ。

勇玖がサバイバルキャンプに出かけて2週間。

転機というものがあつたなら、それは間違いなくその日、その夜に起きた、その事件の事だろう。

俺は夜中にふと目を覚ますと何か猛烈な不安に襲われた。今日もエリナさんの過酷な授業があつて疲れている筈なのに完全に眠気が吹き飛んでソワソワして眠れない。

俺は妙に気になったので普段着に着替えて念の為という事でいつも使っている木刀を持って部屋を出る事にした。

部屋を出て4歩も歩かない内に俺は訳も分からずにすっ転んでいった。躓いた訳でも足を滑らせた訳でもない。理由は単純に物凄い轟

音と振動に襲われたからだ。鼓膜がキーンと鳴り響き平衡感覚が上手く働かず暫く起き上がれなかった。

「痛う。何だ？」

やっと起き上がり聴覚が回復した時には状況は既に動き始めていた。先程の轟音は大魔術による遠距離からの砲撃。そして城の中には大多数の怪しい奴らが入り込んできていた。

城の中にいたものは当然の如く混乱した。混乱した者を――。

「あ」

次々と入り込んだ侵入者達が殺している。

拙いと言う事は一目瞭然。状況は未だに混乱しているが俺は流花さんに言われるまでもなく一目散に逃げ出した。幸い足腰はエリナさんに嫌と言うほど鍛えられている。瞬く間に俺は侵入者達を振り切り――ふと思いついてしまった。

侵入者達が向かっている方向。逃げた俺などに見向きもせず一体何処へと向かっているというのか？

そういえば、エリナさんの部屋はあっちの方角ではなかったか？

それに思い立った瞬間、俺は全身に鳥肌が立ちまくった。

いや大丈夫だ。エリナさんの実力は俺よりも遙かに上。あの程度の奴らなら苦もなく蹴散らすか、もしくは易々と逃げ切れるか。どちらにしろ俺が行っても足手纏いになるだけだ。だから、だから――。

「くそ！」

思いついてしまった以上無視なんて出来るか！

俺は踵を返しエリナさんの部屋がある方へと走り出す。

結果としてそれはある意味正解であり同時に大失敗だった。

俺がエリナさんの部屋のある場所に辿り着いた時その部屋の前には5人ほどの侵入者が集まっており、今まさに炎の魔術を使用してエリナさんの部屋の扉を破ろうとしていた。

「ち！」

俺は後先も考えずに持っていた木刀を、魔術を行使しようとしている奴に向けて投げつける。木刀はあさつての方向に行ってしまったが侵入者達の意識をこちらに向ける事には成功した。そして侵入者は扉を破る為の魔術を俺に向けて解き放ってきた。

焦るな！

俺は慎重に向けられた魔術の対抗手段を練り上げる。大丈夫だ。向けられた魔術は熟練された魔術師の放った物ではないようで低レベル。俺はエリナさんに習ったとおり両手の平に魔力を込めて迫り来る火球を叩き落した。

着弾爆破型の魔術とはいえ魔力は魔力。魔力で相殺して散らせば簡単に無効化出来る。

だから問題は低レベルの魔術ではなく見事な連携で俺を瞬時の取り囲んだ5人の侵入者達だった。

それぞれに毒塗りのナイフと思わしき物を両手に持って取り囲まれている様子は正直生きた心地がしない。

木刀を失ってしまったのは痛い元から戦う気などないので都合は良い。後はエリナさんの部屋からこいつらを引き離してそのまま逃げれば良いのだ。

だから計算外だったのは――。

「正樹さん？」

静まった部屋の外の様子をエリナさんがドアを開けて見てしまったという事。

瞬時に目の前にいた二人の侵入者がエリナさん目掛けて走り出す！しかし俺は特に何もする必要は無かったのだ。エリナさんは無用心に顔を出した訳ではなく、ちゃんと自分で迎撃出来るように使いやすそうな槍を持っていたから。だから、きっと俺が何もなくてもエリナさんは敵を残らず迎撃出来たのだろう。だから――。

「が！」

だから――。

「げふ！」

だからって何もせずに傍観なんて出来るか！

俺は動き出した二人の背後から迫り一人目には肘を首筋に入れて昏倒させ二人目は振り返っていたので膝を腹に叩き込んだ。

そしてエリナさんに背を向けるようにして残り3人に視線を向け――。

「くそ！」

たった今昏倒させた筈の二人が平然と身を起こすのを見ていた。

「どうやら薬によって痛みと恐怖を取り除かれているようですね。

並みの攻撃ではこの人達を止める事は出来ないでしょう。下がってください正樹さん」

今実践したとおり俺には、この侵入者達を止める術はない。だがエリナさんにはあるのだろう。だから俺はここで大人しく身を引いておくのが正しい。

「正樹さん？」

正しいけど分かってしまうのだ。エリナさんにしたってこいつらを止める為の手段なんて一つしかないという事ぐらい。

即ち殺せばいいのだ。

痛みが無くとも恐怖が無くと死ねば動けない。

そして、その事について俺より遥かにエリナさんの方が上手く事を成し遂げるだろうという事も分かりきっている。素手の俺の戦闘力などたかが知れている。

だが、それでも――。

「下がってください」

この人に人を殺させたくなんてないから。だから――だったら俺がやるしかないじゃないか！

俺はエリナさんを背後に下からせて5人の侵入者に向かつて駆ける。理想的なのは各個撃破出来る状況を作り上げる事。その為には――。

「ああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

俺は拳を振り上げ、そのまま拳を床に向けて振り下ろした！

爆発する床。そして飛び散る石の破片。それと同時に俺に右拳が完全に壊れた事を自覚する。だが思い描いた状況は作れた。俺は一番近くにいた侵入者に近寄り残った左の拳を振り上げ――。

やれ！やれ！殺れ！！！

思い切り振り抜いて侵入者の頭を完全に粉碎した！

気分が悪い。吐き気がする。血の匂いがべったりと俺の体中に張り付いているような気がする。

「しっかりしてください！緊急用の脱出口がありますから兎に角、急いでここから離れましょう」

恐らく真っ青な顔でフラフラしているだろう俺をエリナさんが引っぱり張ってくれる。俺達は5つの死体が転がるその場を後にしてエリナさんの案内で地下へと続く扉から城の外へと脱出する為の緊急道を進んでいく。

「流花さんの部屋は反対側でしたね。彼女の事ですから余裕で脱出は出来ていると思いますが反対の脱出口を使う事になるでしょう。直ぐに再会とは行かないでしょうね」

思考が働かない。大事な筈の流花さんの心配をするほどの余裕が俺の中に全く生まれてこない。今は兎に角、震える体で逃げ出したという事しか頭に浮んでこなかった。

「もう直ぐですから、もう少しの辛抱ですから」

何がもう直ぐで何がもう少しなのか分からないが兎に角その言葉を信じて俺はエリナさんに付いて歩く。

震える足取りは頼りない物だったが兎に角エリナさんの言う出口

は見えてきて――。

「残念だがクライリンク城の脱出口は全て把握しているのだよ。お姫様」

そこには10人以上の敵の姿があった。

「なるほど。侵略ではなく反逆だったのですね。道理で手際が良いと思っていました」

侵略ではなく反逆――つまりクーデター、革命。身内からの反乱であつたなら確かに脱出口などは完全に把握されてしかるべきだろう。

しかし、そんな事実より重要なのは――また敵が現れたという事。俺は再度エリナさんを背後に隠すようにして一歩前に出る。

「正樹さん！そんな体で何をしようというのですか」

そんな体。右拳が完全に壊れていて体中が震えて真っ青な顔で――それでも敵がいるなら倒さなくてはいけない。

だって俺がやらないとエリナさんがこいつらを殺してしまうから。だから、だったら、俺がやるしかない！

「姫を護る騎士にしては貧弱だが、面白い」

その俺を前にしてリーダー格と思われる男が一人前に出て剣を構える。相手の獲物は剣。それは都合が良い。

敵が剣を振り上げ、そして振り下ろす少し前にわずかに間合いを詰めて空いている左手で剣を持つ手首を掴み取り、そのまま振り下ろされる勢いを殺さずに――投げる！

以前、勇玖が流花さんにやられた事の再現だ。あの時は自分では把握出来なかったがそれを完全に再現。違う事があるとすれば唯一――。

「ぶげ！」

背中から落ちて咳き込む男に対して頭に膝を落としてとどめを刺した事。そして男の持っていた剣を奪い取り――。

「無茶をしないでください」

震える体をエリナさんに支えられて俺はフラフラと歩く。

今夜だけで既に20人近い人間を殺している。考えただけで気分が悪くなって吐きそうになってくる。

今俺達が向かっているのはエリナさんが子供の頃に立てたという山小屋だ。いつまでも隠れるには適していないが一晩位ならやり過ぎせるだろうと言う配慮からそこへ向かっている。

山小屋に着くまで小さな物音一つに神経をすり減らし恐慌状態に近い状態だった俺はやっと一息ついて落ち着いて――震え出した。今までも十分に震えていたが我慢と緊張が途切れた為に一際強く震え始める。

「落ち着いて。大丈夫だから」

そんな俺をエリナさんが慰め優しく抱きとめてくれる。

眠っては悪夢に叩き起こされて、震え、慰められるを一晚の間に何度も繰り返し、やっと迎えた朝には昨晚より疲労感が強かった。

「正樹さんの状態は一目瞭然ですが敢えて聞きます。大丈夫ですか？」

「これで大丈夫そうに見えるなら眼科に行った方が良いでしょう」

「少しは落ち着いてみたいですね」

「ええ。少しは」

疲労感は強いが気分だけは少しだけマシになってくれた。

「酷なようですが念の為に言っておきますね。その落ち着きは一時的なものです。もしまた戦闘になるような事があつたら再発するものです」

「だから戦闘はするな、ですか？そんなのは襲ってくる敵の方に言っただけです」

俺は唯エリナさんを人殺しにしたくないからエリナさんが人を殺す前に俺が殺しているだけなのだ。

「兎に角もう少しだけここで休んでから東の方へ逃げましょう。ここもあまり安全とは言えないでしょうから」

「ええ」

俺がもう少し回復するまで敵が襲ってこない事を祈るしかなかった。

エリナの事情

私は日向正樹という人について今一図りかねていた。

普段は臆病で自分から敵に突っ込んでいくような人には見えないのに、なのに昨晚は勇敢とも言えるような振る舞いで敵を迎撃した。しかし今はこうして私の腕の中で子供のように震えて泣いている。どちらが本当の彼なのか？

一秒にも満たない思考で結論が出る。臆病なくらい震えて泣いている方に決まっている。

なら何故昨夜はあのような事が出来たのか？

それも、なんとなくではあるが分かるような気がする。

多分彼は——日向正樹という人物は私が考えていたよりもずっと無知な人なのだ。知らない事が多すぎる。彼が唯一知っている事といえば——『頑張る』。それだけなのだ。

逃げるといふ事も諦めるといふ事も選ばないのではなく選択肢がない。だって彼は『頑張る』という事以外知らないのだから。逃げたくても逃げるといふ選択肢を思い浮かべられない。諦めたくても諦める事を想像出来ない。だから——。

「ひつく。ひつく」

今も襲い掛かる恐怖に対して『頑張っている』。

正直な話をすれば私は日向正樹という人物について想像上は理解出来ても本当の意味での理解は出来ずにいた。

だって私は彼ほどの劣等生を見た事が無いし劣等生ではない私には本当の彼を実感する事など出来なかったから。

でも、だからこそ彼は面白い。

私が出す数々の難題に対して彼が出す答えは決まって——『頑張る』なのだ。他に選択肢がない事は分かりきっているので当然の結果なのだが何より面白いのは彼には一欠片ほどの『才能』にも恵まれていない事だ。

一を持つて百を理解する私とは正に対極に位置する人。

今までにも私は誰かに何かを『教える』と言う事はあったが私は『教える』という行為に対して少なからず『自信』があった。事実、私が何かを教えた生徒は例外なく順調に階段を進めていった。

なのに彼は私が教えているにも関わらず私が用意した階段の斜め下へと勝手に進んでしまう。

自慢ではないが『教える』という事に関してこんなに苦勞をしたのは初めてだ。一を持つて一すら理解出来ない彼は一ではなくコンマ五から教えていく必要がありコンマ五の教育は流石の私も骨が折れた。

この私だ。

この私が『苦勞』して『骨を折る』くらい彼には才能というものが欠けている。

そして、その苦勞というものが——。

どうしようもないくらい面白かった。

私はいつも退屈だった。

だって何をしてても人並み以上に出来るし努力をしなくても出来てしまうのだ。そんな私だったからいつも何をしても退屈だった。

唯一私と才能を並べる位に剣の才能に溢れた流花さんと話すのは退屈を紛らわせてくれたけど楽しいとまでは思わなかった。

だから日向正樹の登場は私にとっては衝撃だった。

世の中にはこんな人が居たのだという事実が新鮮で、いつまで経っても『頑張る』以外の選択をしない彼が楽しくて、だから——。

一つと言えど彼への教育を邪魔した流花さんには本当に腹を立てていた。

私が苦勞して作った彼の土台に土足で上がりこんできて勝手に色を着けた事には未だに憤慨している。しかも、その色が私の着ける事の出来る色よりも鮮やかで美しかった事が尚も腹立たしい。

彼女は剣に関してだけは本当に私よりも天才で、その色を塗り直すのが勿体無いと思ってしまうくらい鮮やかだった。

だから剣に関しては諦めた。

諦めたけど——毎晩、私の知らない所でそれが着々と塗られていく様は酷く腹立たしかった。

だから彼に無理難題を押し付けて流花さんとの一時を邪魔していたのに——結局、彼を頑張らせる事しか出来なかった。

本当に愚かで無知で腹立たしく——私を楽しませてくれる。

「さて。そろそろ出発ですけど大丈夫ですか？」

「ええ。なんとか」

クーデターから二日。未だに顔色は悪いが何とか体調をそこそこに整えた彼を引きつれ私は安全を求めて東へと向かう事にする。

東が安全だという保障は何処にもない。しかし皇女である私に対しては何処に逃げても網を張られているのは間違いない。ならば完全に包囲される前に強引にでも突破しないと逃げ道がなくなってしまう。

「正樹さん。右手の調子はどうですか？」

「あ、はい。なんとか」

無謀とも言える無茶をして完全に壊れた彼の右手だったが私の使う治癒魔術で何とか使える状態まで復帰している。もっと整った環境で治療すれば完全に癒す事が出来たのだが、この状況ではこれが精一杯だ。

それにしても彼の状態は思った以上に変化している。昨夜までは

震えて手の付けようも無いほどだったのに今は落ち着いている——
というよりは気が抜けているようだ。

でも彼はその位の方が良いかもしれない。下手に張り切って前線に立たれるよりは少々気を抜いている位が彼に相応しい——。

「敵です。下がって」

と思ったのは私の完全な勘違いだった。

山小屋を出てからまだ幾許も経っていないが私達は既に敵と遭遇していたらしい。それを何故、彼が私よりも早く察知する事が出来たのか？

初戦で才能が目覚めた？ 実戦を経験して一回り成長した？

勿論そんな訳が無い。

彼は単純に怖がっていただけだ。怖いから周囲を警戒する。過剰なまでに。

私が気が抜けていると見えた彼は私以上に周囲に対して警戒していた姿だった。外にばかり気を取られているから内側にいる私には気が抜けていると思えるほどにボーっとして見えたのだ。

そして直ぐに戦闘が始まる。

今回の追っ手は12、3人くらいだろうか？

「14人です。周囲を囲んでいるのが12人。木の上で弓を構えているのが2人です」

なるほど。言われてみれば確かに木の上にも何人かいるようだ。

しかし良く彼にそこまで把握出来るものだ。それほどまでに周囲を警戒するほど恐怖心が高いのか——いや多分これは元から彼に出来た芸当なのだ。つまり流花さんの指導の賜物だった。

気に食わない事甚だしいが今はそれに不平をこぼしている時ではない。私はまず木の上にいると思わしき者達に対して——。

『火球・連撃！』

「え？」

私が使おうとしていた魔術は、しかし私が解き放つよりも先に隣から発せられ敵を薙ぎ払う。

迎撃者の名は日向正樹。確かに私は彼に魔術を教え中位の炎術くらいは使えるように指導したが私より早く使えるとは意外だった。彼は私よりも早口で詠唱出来る——訳が無い。なら単純に私が詠唱を開始する前に唱え始めていたのだ。

何故？

先日の戦闘から思っていた事だが何故か彼は私を戦わせたくないようだ。彼は私が前に出るよりも先に仕掛けている事から考えても間違いない。彼が自分から戦いたがるような性格ではないのは分かりきっているので、やはり彼は私が参戦する前に戦いに身を投じて私を戦闘から遠ざけている節がある。

その理由は彼の感情の中にあるのだろう。幾ら私が洞察に優れていても感応力がある訳ではない。細かい事情など分かる訳が無い。唯、なのに、どうしてそれを連想してしまっているのだろうか？単純で、我侭で、傲慢な理由。

私に人を殺させたくないから。

本当に子供みたいに我侭で人として傲慢な理由だ。けど、なんとなく間違っていない気がする。私が殺さなくてはいけない敵は全て自分が殺すから、だから私は人を殺すな。彼ならきっと、そんな馬鹿な理由でも立ち上がって『頑張る』には十分な理由だったのだろう。

本当に、単純な、人なんだから。

第三章

本当に情けない話なのだが俺は人を殺す度にエリナさんに一晩中慰められてやっと次の日に奮い立てるのが実情だった。

「兎に角、追っ手に見つかからないように進みましょう」

だからエリナさんがそう提案してくれたのは正直大助かりだったし包囲網を最低限の戦闘で突破出来たのは間違いないくエリナさんのお陰だった。

「包囲網は突破出来ましたし完全ではありませんが追っ手も撒いたと思つて間違いないでしょう。反面、私達の味方となつてくれる人との合流も難しくなつてしまいましたが今は安全を一番に考えます」

俺達の味方になつてくれる人———そういえば流花さんは大丈夫だろうか？それに勇玖も城を離れていたとはいえクライリンク側の人間だ。無事だろうか？

「大丈夫ですよ。恐らく今最も危険なのは私達ですから。他の人を心配する前に私達の安全を考慮しましょう」

「そう、ですね」

考えてみればエリナさんは王家の血筋の人だ。今一番狙われている可能性があるのは彼女と言つても過言ではないだろう。

「ところで一時とはいえ安全が保障された今の内に今度の方針を決めて動く事にしましょう」

「方針ですか？」

「具体的に言うならば『国を取り戻すか』『放棄するか』です」
「あ」

そうか。俺のような王家と何も関係ない奴と違つてエリナさんは直接王家に關係のある人なんだから国を再建するという選択肢も当然ある訳か。正直、生き延びるのに必死で全然そんな事を考えていなかった。

「正直、今回のクーデターは入念に準備されていた物のようで私は逃げ延びていますが成功したと言っても過言ではないでしょう。一度塗り替えられた王家に再度革命を起こすのはよほどの事が無い限り賛成出来ません。国に住む民にとって誰が納めようと大した変わりはない筈ですから」

「えっと。エリナさんはそれで良いんですか？」

「私が皇女の地位に未練があるように見えますか？」

「言われてみれば確かに彼女は皇女と言う地位に煩わしさを感じていても未練があるようには思えない。」

「それじゃ余程の事が無い限りは革命は・・・」

「余程の事が無い事を祈りましょう」

こうして自分の地位や名誉を簡単に捨てられるエリナさんの潔さには感動すら覚える。しかし、そうすると――。

「これからどうしましょう？」

ある程度の安全圏まで逃げ延びた俺達には特にやる事がない。

「そうですね。とりあえず落ち着ける所まで落ち着いてから・・・」

「落ち着いてから？」

「二人で考えましょう」

不覚にもその時初めて、これから先も暫くは彼女と二人きりなのだと思いついた。

考えてみると、確かに国を放棄すると言う意見を通せば俺とエリナさんには安全を確保以上には特にやる事は無い。しかし、それはあくまでも必須ではないと言う意味であって何も出来ないという事ではない。

だからと言う訳ではないのだが――。

「これって今やらなくちゃいけない事ですか？」

比較的安全を保障され暇になった途端エリナさんは俺へと授業を再開してしまった。

「何か不満でも？」

「いえ。例えば生活費を稼いだりとかはしなくて良いんですか？」

「城を出る時に念の為、宝石を幾つか持ってきましたから。それを売れば2、3年は特に働かなくても生活に不自由はしませんよ」

「そ、そうですか」

「それと。もう私は皇女ではありませんから敬語は不要です」

「え？いえ今までも別に皇女だから敬語を使っていた訳じゃなくて目上の人だから使っていたんですけど」

俺の言葉にエリナさんは何故か溜息をついて嘆息する。

「正樹さんから見て私は幾つに見えますか？」

「え？えつと・・・」

多分年上だと思うけど、そういえば幾つなんだろう？

「今年で18になります。正樹さんとそれほど違いがありますか？」

「そ、それは確かに」

「第一こうして庶民として暮らすのに敬語では逆に怪しまれてしまうではありませんか。その意味を兼ねて敬語を廃止しようと言っているのです」

それは確かにもっともな意見だと思うのだが――。

「エリナさんだって敬語じゃないですか」

「私はこれが素の喋り方ですから。でも、そうですね。正樹さんにはかり強要するのはフェアじゃないかもしれません」

そうしてコホンと一つ咳払いをしてから――。

「それじゃ、これからは少し言葉使いを改めるわ。正樹」

全く持つて見事な言葉の使い分けを披露してくれた。

自慢じゃないが俺はエリナさ――エリナほどには柔軟な思考はしていない。だから言葉使いを改めるのは徐々にという事で許してもらった。

それは兎も角――。

「それじゃ時間もある事だし色々教えてあげるわね」

エリナの授業はやはり実行されるらしかった。

ここでエリナの授業が行われたのは約一ヶ月。

内容的には何故か戦闘技能といったものが多く、素手で戦う柔術から始まり槍術、弓術などを仕込まれた。

エリナとしては元々そういう展開を予想していたのか既に俺の地下というものは十分に比較的——俺にしては比較的スムーズに修得がなされていた。

その合間にも一応剣術の方もサボる事はしなかった。

エリナを信用していない訳ではないが使えるかどうか不明な戦闘技能よりも既に使えると証明された剣術を手放す事が怖かったのだ。

エリナの説明

正樹が流花さんに習った剣術を端的に述べるならば2つの技法と2つの概念によって形成されている。

技法の一つ目は『呼吸』と呼ばれている物。

この呼吸という技法は単純に私達が行っている呼吸とは異なり万物に存在する破砕点の間の事だ。分かり易く言うならば全ての物に存在する一番脆い瞬間を察知する為の技能といえれば良いだろうか？万物には呼吸の間があり、その間を突けばたとえ非力な人間でも岩を割ったり鉄を切ったりする事が出来る。そんな技法だ。

正樹が石で出来た床や人間の頭を粉砕したり出来たのは、この呼吸の技法のお陰と言っても過言ではない。もっとも正樹は未熟なので固い床を粉砕した時には自らの拳を壊してしまっていたが。

あれが流花さんあたりなら自分を無傷のまま完全に廊下を崩すくらい的事はやってのけただろう。

何しろ極意は攻撃する物の最も脆い瞬間を自分の最も硬い瞬間で撃つ事らしいから。

だから自らも傷を受けた正樹はやはり未熟という事なのだろう。

次に『領域』と言われる技法がある。

領域とはその名の通り自分を中心にして薄い膜のような感覚を展開する事を意味する。展開された領域は自分そのものと言って良い、故に領域内に入った者は通常なら100%察知出来るし熟練すれば領域内の侵入者の行動を完全に把握出来るようになる。

正樹が私より先に敵を発見出来たりしたのはこの技能があつたらだ。

勿論、正樹はこれに関しても未熟なので展開出来る領域はせいぜい半径50メートル前後といった所。しかもかなり不鮮明で敵が『居る』『居ない』の区別くらいしかつかない。

これが流花さんなら領域の半径は数百メートル。しかも領域内の侵入者の会話まで察知出来るらしい。

以上が正樹が修得した技能の全てである。

残り二つの概念に関してはハッキリ言って正樹の完成度は皆無と言つて良い。正樹の物覚えの悪さも原因だが最大の問題は時間が足り無すぎたのだ。

正樹が流花さんに従事してたったの数ヶ月。私が妨害した事も原因の一つではあるが、この短期間に全てを修得しろというのは幾らなんでも酷というものだろう。

「その流花さんが居ない現在、正樹には剣術に代わる技能を身に付けて貰うのは当然の話でしょ？」

「そ、そう・・・だな」

一応、俺は頷きはしたが納得は出来なかった。

何故なら100%嘘だと分かりきっているからだ。幾ら鈍い俺でもエリナが俺に授業をするのは俺の為というよりもエリナが楽しい

からだ、というのは流石に分かり始めていた。エリナが俺に授業をするのは多分の趣味と少量の実益を前提としているが本音で言えばきつと趣味が100%だと断言出来るくらいは。

「さて。それじゃ次は・・・」

エリナが次の授業に移ろうと準備を始めた瞬間――。

「きゃ！」

俺はエリナを強引にその場に押し倒し強く抱きしめる！直後、俺達の住んでいる部屋が爆発と共に炎に包まれる。

「・・・敵襲？」

この状況においてエリナは尚も冷静だ。冷静に見えるが――何故かちよつぱり不機嫌になったような気がする。

「正樹、怪我は？」

「とりあえず、ちよつと火傷した位で問題無い」

「そう。でも今度から行動よりも言葉で忠告して。この程度の魔術なら幾らでも対抗手段はあるから」

「わ、わかった」

本音で言えばそんな時間は全然無かったのだが、それはつまりもつと早く察知出来れば良いだけの話だ。察知するのが襲撃直前では意味が無い。

「兎に角、脱出が最優先。その後に追撃してくる敵を消極的に迎撃しながら逃げましょう」

「了解」

瞬時に立てられたエリナの作戦に従い俺はエリナを伴い火の海と化した部屋から脱出を図る。しかし脱出の方は兎も角――。

「・・・」

消極的に迎撃というのは難しそうだ。囲まれている状況なら尚更に。

俺達に追っ手として襲ってきた人数は5人ほどだった。

「ほお。これが噂に聞いた白の癒し姫か。なるほど確かに美しい」

その内の一人が俺を完全に無視してエリナに視線を向ける。その視線を感じてかエリナが5人から直線上になるように俺の後ろに隠れる。

「しかも護衛はヒヨロイ小僧一人と来たもんだ。ぼろい仕事だな」

5人の言動を察するにやはり標的はエリナのようなのだ。俺は燃える小屋の中から持ち出した剣を鞘から抜き放ち5人と対峙する。

「おいクロン。こいつはお前にくれてやるぞ」

「ち。雑魚の始末かよ。ついてね」

しかし俺の前に立ちはだかったのは一人の大男のみ。どうやら他の4人は傍観するつもりらしい。事情は知らないが好都合。他の4人から注意を逸らすつもりはないが一人ずつ相手に出来るのは願っても無い事だ。

「おい。少しは楽しませてくれよ」

エリナを下がらせて対峙した俺に大男——クロンと呼ばれていた男は不遜に言い放ち俺に向かって大胆に突撃してくる。

速い。外見からは考えられないほどのスピードで俺との間合いを一気に詰めたクロンという男は豪快に拳を握り振り回す！

「く！」

回避は成功したがこの威力——かすただけで俺の体などボロ雑巾だ。

しかし一撃をかわした今が反撃のチャンス。俺は持っていた剣を下から掬い上げるようにして男の足に斬撃を見舞い——。

「痛！？」

剣が容易く弾かれる！鎧や帷子などは見受けられないのに——何故？

「くく。驚いたか？俺様の体はそんじょそらの鎧なんかよりも頑丈に出来ているのよ。雑魚の鈍らなど避けるまでもないわ」

鈍ら。確かに俺の持っている剣は鈍らだ。だが今の一撃は呼吸を聞いて繰り出した一撃だった筈。不完全とはいえ確かに呼吸の合間を狙った一撃だった筈なのに剣が命中する瞬間に呼吸が変化した。

「どれ。さつさと片付けるか」

そしてクロンという大男は右腕を大きく振り上げて――。

「弾けるや！」

豪快に地面に突き刺した！地面が爆発したように弾け土や岩の塊が俺の方へと降り注ぐ！以前にクライリンクの城で俺が床を爆発させた事があつたが、あれとは桁違いの威力だ。

「クロン！雑魚は兎も角、白の姫にまで被害が及ぶような技を使うな！」

「おっと。忘れていたぜ。しかし・・・」

俺は爆破の瞬間エリナを抱きかかえ飛び上がった大きな岩を踏み台にして爆破の被害から逃れる事に成功していた。

「思っていたより雑魚でもなさそうだ」

そう言つてクロンという大男は壮絶な笑みを見せた。

クロンという大男の戦い方は非常に単純で豪快なものだ。

圧倒的なパワーを持つ両手、両足を駆使してあらゆるものを薙ぎ払い圧倒的な硬度を誇る体で全ての攻撃を弾き返す。

非常にシンプルだが、それだけに強敵だった。

「どうした！逃げ回るだけか！」

「く！」

クロンの言うとおり俺は足に見舞った斬撃の後から防戦一方の戦いを強いられている。なんといつても、この男の攻撃は地面を殴れば巨大なクレーターを作り空を殴ればその風圧だけで背後の木が薙ぎ倒される。一撃でもまともに受ければ俺の体など間違いなくちぎれ飛ぶ。

そして防戦を強いられる俺はエリナと僅かに距離を作られてしまふ。

「鬼ごっこはここまでだ！」

そして、その距離を確認したクロンは再び拳を振り上げる！

「今度こそ弾けるや！」

地面に突き刺さる拳。弾ける地面。俺はそれを——待っていた！
大きな岩が吹き飛ぶのを目にしてそれを足場にクロンの上空へと逃れ、そして着地した先はクロンの真後ろ。既に体勢は整っている。俺は剣を振り上げ——背後を横目で見たクロンはニヤリと笑う。

その笑みを無視して俺は渾身の力を籠めて剣を振り下ろす！

剣は硬い感触を感じながら——打ち下ろしたクロンの腕に半ばまで食い込んだ！

「な！？」

驚愕を顕わにするクロン。確かにこいつの体は頑丈に出来ているらしいが重要なのは呼吸を合わせる事だ。先程は急激的な呼吸の変化についていけなかったが今の俺は呼吸が急激的に変化するのだと『知っている』。

だから変化後の呼吸に合わせて振り下ろした。

予想外だったのはクロンの体が思っていたより遥かに頑丈だった事。そしてパリン！と砕け散る俺の剣の脆さ。

切断する筈だった腕は半場まで切れているものの健在で、血を流したクロンは怒りの視線を俺へと向けている。おまけに俺の獲物である剣は粉々だ。

状況は好転するどころか悪化している。

更に——。

「そこまでだな」

「あ」

声に視線を向けるとエリナに向けて剣を突きつける一人の男の姿。迂闊。クロンを倒す事を優先してエリナから離れてしまった。

「クロン。さっさと踏み潰してしまえ」

絶体絶命のピンチ。エリナは俺に大丈夫だという視線を向けてくれているがエリナが人質に取られていると思うと満足に動けない俺の窮地。そしてクロンの好機においてクロンは拳を振り上げ——
|。

「邪魔すんじゃないね

——！！！！」

吼えた。

「折角の楽しい獲物との勝負に水を差すな！そんな女こいつを片付けてから分捕れば良いだろうが！」

明らかに怒りに震える顔で、しかし壮絶とも言える笑みを浮かべてクロンは言い放つ。

「確かに雑魚ではなかったようだが相手は獲物を失っているのだぞ？そんな相手に楽しめるのか？」

「は！獲物を失ったぐらいで戦力が落ちるようなら所詮その程度だったという事だ。兎に角お前はすっこんでろ！」

エリナに剣を突きつけていた男は肩を竦めて他の3人の元へと戻る。それにしても獲物を失ったくらいで、か。言ってくれる。

俺は柄のみになってしまった剣を放り投げ素手で持ってクロンと対峙する。もう小細工は通じない。

「ハッハー！がっかりさせんなよ、おい！」

その俺の構えを見て真正面から俺に殴りかかってくるクロン。その拳に合わせて俺は自身の右手で拳を作り、打ち出された拳に拳を叩きつける！

「痛っ！」

結果、拳と言わず右腕全体から血が吹き出る。

「く。かはは！」

対してクロンの拳は——。

「やるじゃねえか」

拳に俺の拳大の陥没が出来ていた。

「ち」

呼吸を合わせた渾身の一撃だったのだが指の骨を数本へし折っただけに終わった。本来なら拳を完全に破壊する事が目的だったのに本当に頑丈な奴だ。

「楽しい。楽しいぞ！てめえ！もつと俺を楽しませろ！」

打ち出される左の拳。腕が半場切断されて指の骨を数本折っている右手なら兎も角、左手に正面から対峙出来るほどの力は俺にはない。横薙ぎに振るわれた左の拳を屈んで回避してから呼吸を読み渾身の肘を脇腹に叩きつける！

その一撃を受けニイと笑うクロン。効いていない？いや、耐えられた！

そう察知すると同時に俺は後方へと距離と取る為に飛び下がるうとして――。

「おっと。逃がさねえぜ」

左手を右手で掴まれた。

「結構効いちまったが耐えられねえほどじゃない。こっからは俺の反撃だぜ」

そして右手一本で突き上げられる俺の体。ヤバイ。俺はとつさに足でクロンの体に打撃を与えるが――地面から離れている為に踏ん張りが利かず威力が出ない。

「終わりだ」

言葉と共に繰り出されるクロンの渾身の左拳。回避は――不可能！

「か・・・は！」

俺の腹に突き刺さるクロンの拳。胃が悲鳴をあげて腹の物が逆流しそつだ。

「粘るじゃねえか。そうじゃなくちゃな」

だが生きている。クロンの左拳を突き出された瞬間に何とか右の肘で左手首を打撃出来たお陰だ。威力が半減したお陰で死なずにすんだ。だが――。

「あと何発耐えられるかな？」

状況は全く好転していない。

蹴り殺しとはやはり違うのだろう。

クロンは間違いなく俺を殺す気で一撃一撃を繰り出してくる。そ

れをなんとか死なないように頑張つて余計に苦しんでいるのは俺のせいなのだから。

腹を何度も殴られ左手を捕まれたままそこら中に叩きつけられ、それでもなお俺は生きている。

「本当に、しぶとい野郎だ」

そして気が付くと状況が変化していた。クロンの息が荒く場所も変わっている。どうやら振りまわされた時に結構移動してしまったようだ。

俺の背後には見上げるほどの絶壁が立ち上りクロンの背後には底が見えないほどの崖がある。俺とエリナが住んでいた家から近くにある場所だ。

「こいつで終わりだ！」

そして、どうやらクロンは俺を絶壁に押し付けて逃れられないようにした上でとどめを刺すつもりのようなのだ。

しかしクロンも疲労の為に懸念していたのだろう。後ろに絶壁があるという事は――俺の足場も確保出来ると言う事だ！

クロンの左拳が繰り出される前に俺は背後の絶壁を蹴り付け渾身の力で右拳をクロンの腹に叩き込む！

「ぐふ！」

溜まらず膝をつくクロン。そして、これが最後の勝機――俺に残された最後の手段。

俺は解放された左の掌をクロンの腹に押し付け――。

「エリナ式柔術、奥義・・・」

右手にはありったけの魔力を込めて――

「秦一滴くしんいつてき>」

クロンの体の中へと注ぎ込んだ！

エリナの事情

「え？」

それを見た時、流石の私も呆気に取られた。

柔術奥義『秦一滴』は、その名の通り私が理論を完成させて正樹に伝えた奥義だ。でも完成していたのは理論のみ。実戦で使うとなれば完全な欠陥奥義の筈だ。なのに――。

「げは！ごぼおー！」

秦一滴を受けた男は口から大量の血を吐き出し、それどころか体中から血を噴出させている。あれこそまさに秦一滴の効果だ。

打撃による内部破壊の昇華系。それが秦一滴の正体。

左手で相手の体に入り口を作り、その左手に右手を合わせるように魔力の超振動を送り込む。送り込まれた魔力の超振動は相手の血液を残らず沸騰させ、結果あのような事になる。

しかし、あの奥義は欠陥品だ。理由は単純に魔力を大量に必要とし過ぎるから。正樹は勿論、私の全魔力を持っても足りない位の魔力が必要になる。

なのに、どうしてあの男に秦一滴が通用したのか？

恐らく、その鍵はあの男の異常なまでの体の頑丈さにある。あの男の異常なまでのタフさは魔力を己の体に浸透させ身体耐久力を極限まで高めると言うものだったのではないだろうか？だから正樹が魔力を送り込むまでもなく男の体内には魔力が充満していた。そこに正樹が超振動の微量の魔力を送り込んだ為、波紋のように魔力が広がって秦一滴が効果を成した。多分そんなところだろう。

正樹がそれを計算して秦一滴を使ったのかと言うと――勿論そんな訳がない。単純な話、正樹には他に手が無かったただけだ。剣もなく身体能力も限界を迎えていた正樹には他に攻撃の手段が無かった。だから、この結果はただの偶然。

でも、間違いなく――正樹の勝利だ。

送り込んだ魔力が微々たる物だったとはいえ正樹にとって大半の

魔力を消耗した事には違いない。しかし私の教育の賜物で全魔力を消耗してしまうような事は無意識に避けるように教えたので命には別状はないだろう。魔力とは生命と等価値の生きる為に必要な原動力なのだから。

私はフラフラしている正樹の元へ駆けつけようと走り出して——その時、異変が起こった。

「グアアア

——！！！」

秦一滴を受け、血を噴出していた男がしぶとく立ち上がり暴れ始めた。

秦一滴を受け、まだ動き回れるとは呆れた生命力だが体中の血液が沸騰していてもはや助かる術はない。ひとしきり暴れ回った後には死が待っているだけだ。なのに——。

「あ

その暴れ回る男の被害は近くで動く事も出来なくなった正樹に及んだ。

沸騰した血液は口は元より鼻、耳、目からも吹き出している為、五感ほぼ役立たずの筈。だから多分それも偶然だったのだ。

暴れまわった男が突撃したところに正樹が居て、その背後が崖だった事は。

男諸共崖の下へと吸い込まれるように落ちていく正樹。

必死に手を伸ばした。崖のギリギリまで行つて必死に手を伸ばしたが——あと一步届かなかった。落ちる正樹。その正樹の顔に何故笑みが浮んだのか。知るのもう少し後。

「相打ちか。伊達に白き姫の護衛をしていた訳ではなかったらしいな」

そうだった。正樹が倒したのはあくまで5人の内の1人。まだ4人ほど残っていたんだった。

「さて。それでは我々と来て貰おうか。白き姫よ」

でも、こう言うてはなんだけど私は危機感を感じない。正樹を失

い自分が失意の中に居る事も原因かもしれないが、それとは別に私は知っているのだ。

正樹と言う存在は実は私にとって強大なリミッターだったのだという事を。

勘違いして貰っては困るが私は戦闘能力で言えば正樹より更に下だろ。正樹はそう思っていないかもしれないが実戦を知らない私は戦闘において正樹よりも役立たずだ。

私が言うリミッターとは私が生まれ持っていて正樹と出会った事により忌み嫌うようになったもの。

天性の強運だ。

この状況で私が無傷で助かるとしたら例えばあの人都合良くこの場に現れるとか――。

「やれやれ。やっと見つけたと思えばややこしい事になっているよ。うだな」

予想通りの展開に私を除くその場に居た4人から動揺がもれる。

この場を収めるのにもっとも適役の彼女の名は――流花さん。

正樹があれば窮地に陥った時には全く現れる気配も無かったのに私が少しピンチになっただけで簡単に現れてしまう。

私はこの自分の強運が大嫌いだった。

私が『こうなれば良いな』と思った事が大抵の場合『そうやってしまふのだ。子供の頃からずっとそうだった。だから私はこの強運が大嫌い――この強運を相殺してくれる正樹の傍が一番心地良かった。』

別に正樹に私の強運を相殺する能力がある訳ではない。ただ正樹には私の強運を相殺してしまうほどの不運があったというだけ。

多分、正樹は私とは逆で『こうなって欲しくないな』と思う事が大抵の場合『そうなって』しまふ不運の持ち主だったのだろ。

だから正樹と居る時は自然と私の強運は緩和されていた。

不意に思い出すのは正樹が最後に笑みを浮かべた理由。恐らく正樹は自分の領域を持って流花さんの接近に気付いたのだろう。だから後は大丈夫だと思ったから笑みを浮かべたのだ。

もう少し早ければ、後ほんの少し流花さんの到着が早ければ正樹が奈落に落ちる事も無かったというのに。

第四章

目を覚ますと少し古ぼけた天井が見えた。

自分の状況が良く理解出来ず横になったまま頭を左右に振って目を手でこするうとして——腕が全く動かない事に気付いた。

「あ・・・れ？」

縛られている訳ではないし拘束されている訳でもない。でも俺の腕はピクリとも動いてくれず、それどころか首から下が全く言う事を聞いてくれない。

「おや？目が覚めたのかな、名無し君」

「え？」

誰——というか、ここは何処だ？俺は何故こんなところで動けなく——。

「あ」

そこまで思考したところで不意に思い出す。

そうだ。俺はあのクロンという大男と戦って『秦一滴』を打ち込んで、それから——そう確か崖に落ちたんだ。あがいたクロンに巻き込まれて。

「何で俺は生きているんだ？」

「そりゃ私が君を治療したからだろう。ここに運ばれてきた時は酷いものだっただぞ。医者 of 私が言うのもなんだが思わず匙を投げそうになったくらいだ」

「じゃあ俺は本当に・・・」

「ああ。間違いなく生きているよ。医者 of 私が保証する」

「そうか助かったのか。これで少しはエリナにも顔向け出来ると——」

「あ！」

「おいおい。無理をするな、名無し君。まだ動ける体じゃないだろ」

う」

思わず起き上がりかけた俺をその医者が押しとどめる。医者に再度ベッドに寝かされながら俺は重要な事を思い出していた。

エリナ——どうなったのだろうか？崖に落ちる寸前に流花さんが接近してきているのはなんとなく察知出来た。だから安心して場を任せられると思ったのだが生きていたなら心配を掛ける前に帰らなくては。

「あの、ところでどうして俺は動けないんですか？俺の怪我ってそんなに酷いんですか？」

「ん？怪我の方は粗方治っているよ。後遺症の方も得に心配は無いだろう」

「えっと、それじゃどうして・・・」

「そりゃ一年も眠り続けていたら筋力が衰えて動けなくなるなるだろう」

「ああ。そりゃそうですね」

「一年も眠り続けていたなら確かに動けなくても——」。

「って！一年！？」

思わずガバリと身を起こそうとして起こす以前に医者にその身を押しとどめられた。

「慌てるなよ、名無し君。最初から説明してやるから」

「は、はあ」

医者が言うには俺は今から一年前、瀕死の重傷で倒れているところを発見され、この診療所に運び込まれたのだそうだ。

「そつえば自己紹介もしていなかったな。私は早房という。君もいつまでも名無し君のままでは具合が悪いだろう？」

「あ。俺は正樹です。日向正樹」

「ふむ。なかなか立派な名前じゃないか。実を言うと今まで君の名前が分からなかったので名無し君としか呼んだ事が無かったのだよ」

「は、はあ」

まあ、それは今までの会話からなんとなく分かるが。

「さて。名無し君も今日はもう休みたまえ。君の体が動けるようになる為にはリハビリが必要になるだろうからね」

「つて。名乗った意味が全然無いし。」

「ええ。ありがとう・・・ございます」

しかし自覚は無かったが俺の体はそれなりに疲れていたらしい。早々に意識が落ちて眠りについてしまった。

翌日、俺は――。

「本当なんですか？」

「事実だ。昨日名無し君は目を覚まし私と会話をして自己紹介までしてくれたからな」

「それじゃ、この人の名前は？」

「・・・忘れてしまった」

おいおいと思いながら、その声で目を覚ましていた。

「日向正樹です」

「あ。名無しさん」

「・・・まあ、良いけどね。なんと呼ばれようと」

「あ。ごめんなさい」

俺の枕元で話をしていた1人は予想通り昨日の医者で、もう1人は幼い黒髪の少女だった。

「一応紹介しておこう。彼女は君の第一発見者・・・つまり君の命の恩人である花輪くかりんちゃんだ」

「『ちゃん』は止めてください、先生」

「良いではないか。君の容姿と相まって非常に愛らしいぞ」

なにやら漫才のようなやり取りをする二人。何気に仲は良いらしい。

「そっか。君が俺を助けてくれたのか。流石に覚えていないが、ありがとう。助かったよ」

「い、いえ。私は当たり前の事をしただけで・・・」

「おやおや。初な花輪ちゃんをもう口説き始めたか。意外に手が早いな、名無し君」

昨日も思ったが、この人言動がおっさんだ。

兎に角、今日からリハビリ開始である。早く動けるようになってエリナの所に帰らないと。

しかしエリナの時も無理難題を押し付けられる時はあったが、この医者はある意味エリナとはベクトルが違う無理難題を押し付けてくれる。

「それじゃ、まずは町の外周を10往復かな」

「あの。俺立つ事も出来ないんですけど」

「甘えるな！立てないなら這いずり回ってでも10往復だ」

「おいおい」

まあ流石にそれは半分冗談だったのだが残りの半分が本気というのが怖いと思った。

そんな無茶なりハビリを一ヶ月ほど続けた結果、何とか日常生活では支障が無いくらいには体が回復してくれた。

「さて。体の方も順調のようだしいつまでもそんな格好というのも不便だろう。私が名無し君の為に特別に衣服を新調してやったぞ」

「元はといえば俺の服を誰かが勝手に捨ててしまったのが原因だったような」

「気にするな！」

俺が今現在着ている服は言ってしまうえば白い入院用の浴衣のようなものである。当然これしかないのだからリハビリもこれで行った。当然といえば当然だが道行く人から妙な目で見られた。

「第一君の服はあちこちボロボロだったぞ。君の血がベツタリ付いて洗うのも面倒だったし」

「後半が本音じゃない事を祈ります」

ともあれ医者が用意してくれた衣服は、この辺りの普段着にされ

ているのか和服に袴だった。少々着方に自信が無かったが医者 of 助言に従いまともに着る事は出来た。案外着心地は悪くない。

「ふむ。なかなか似合うじゃないか。少々髪がだらしないがね」
「む」

元々短くは無かったのだが一年以上も眠り続けていたせいで俺の髪はかなり伸びていた。肩口よりも下まで伸びっぱなしの髪は確かに少々だらしく見えるかもしれない。

「でも、この辺りって髪を切る所は無いんでしょう？」

「だから私が切つてやると言っているではないか」
「謹んでお断りします」

この医者 to 任せたら丸坊主にされる事は間違いない。俺達がそんな口論をしている内に診療所 of 入り口が開き花輪が入ってきた。

「あれ？着替えたのですね。よくお似合いですよ。名無しさん」
「・・・ありがとう」

既に本名を明かしたというのに『名無し』と言われ続けた期間が長すぎた為、誰も俺を本名で呼んでくれない。

「兎に角、髪を切るのは今度にして何か縛るものでもください」
「髪を縛るものですか？」

医者に言つたのだが反応したのは花輪の方だった。

「だったらこれはどうでしょう？私が貰った物ですがあまり似合わなかったのだ」

そう言つて花輪が懷から取り出したのは赤く細い紐のようなもの——俺の目に狂いがなければリボンじゃないだろうか？

「あ。いや、その・・・」

「かっかっか。良いじゃないか名無し君。折角の花輪ちゃんからのプレゼントだ。彼女の好意を無にするほど君は非情ではあるまい？」
「それじゃ着けてあげますね」

結局、俺はなし崩し的に花輪の差し出したりボンで髪を止める事になった。当然といえは当然だが格好はまともになったのに街中ではまた妙に注目を集める事になった。

「そついえば花輪って何処に住んでいるんだ？」

格好がまとも——かどうか微妙だが一応整って雑談をしている最中にふと今まで疑問に思っていた事を尋ねていた。実際に外を出歩けるようになって知った事だが花輪はこの近所に住んでいる訳ではないらしい。

「えっと。この町から出て少し南に歩いた所です」

しかし、あまり聞かれたくない事だったのか花輪の歯切れは悪い。まあ敢えて深く尋ねようとは思わなかったのだが——。

「そんなに気になるなら花輪ちゃんを家まで送ってあげたらどうかね？名無し君」

「え？え？」

「まあ俺は構いませんけどね」

慌てる花輪には悪いが多少興味はある。結局、医者の口車に乗って俺は花輪の家へと彼女を送る事になった。

「寺って感じじゃないよな？道場かな？」

「え、ええ。ここは私の親戚が経営している剣術の道場です」

花輪の案内で俺が辿り着いたのは、そんな感じの道場だった。

「ふゝん。見学とか大丈夫なのか？」

「ええ。一応」

花輪の態度はオドオドしてしまっているが別に部外者立入禁止という訳ではないらしい。俺は花輪を伴いその道場とやらを見学する事にした。

中の様子を一言で言うならば確かにそれは『剣術の道場』だった。俺が少し予想していた剣道の道場とは違い皆が木刀を持って打ち合っている光景だ。まあ剣道の道場ではなく剣術の道場なのだから当然か。

「結構賑わっているみたいだな。有名な流派なのか？」

「いえ。本来は一子相伝の古流剣術なのですが最近は経営状態が芳

しくないらしく・・・」

「門下生を増やさずには生きていけなかった訳か」
「はい」

道場の中に居たのは30人ほどの門下生達。そのどれもが正直な話をすれば低レベルだ。まあエリナに下地を作られ流花さんに剣術を習った俺の目からすればの話だが。

「そつえば花輪もここで習っているのか？」

「いえ。私はこの家の子ではありませんから」

「そうなのか」

花輪の足運びなどから多少何かを齧っている様な気がしたが、この剣術ではなかったらしい。俺達は暫くぼんやり道場の見学をしていたが不意に――。

「何をしているか貴様ら！基本がなつとらん！」

花輪と同じ年くらいの少女が現れて門下生達に激を飛ばしだした。

「何だ、あの子？」

「・・・流瀬くながせ>」

「知り合いか？」

「ええ。本来ならこの一子相伝の古流剣術の後継者になる筈だった子です」

「なるほど」

つまり経営状態の悪化を防ぐ為に門下生を受け入れたのは良いが一子相伝とは外れた為、継承権を破棄されてしまったという事か。

「何だ貴様は？新しい門下生希望者か？」

「ん？」

と。いつの間にか流瀬の注意は外野で見学していた俺の方へと移ってきていた。

「いや、俺は・・・」

「牧野！貴様が相手をしてやれ。入門試験には貴様の腕くらいが丁度良い」

「あゝ。だから・・・」

色々言い訳をしようとしている内になし崩し的に俺は木刀を渡され牧野という門下生と対峙する事になってしまった。

「何でこんな事に・・・」

「ボヤボヤするな新入り！始めろ！」

そして問答無用で開始される試験試合。相手の牧野という男は——なるほど大した腕ではない。試験の相手としては無難というところだろう。俺は木刀で打ちかかってきた牧野の一撃を木刀で捌こうとして——カクンと足の力が抜けて尻餅をついてしまった。

リハビリを終えたとはいえ、それはあくまで日常生活に支障の無い程度の回復である。低レベルとはいえ戦闘を行うにはまだまだ鍛錬が不足していたのだ。

とはいえ——。

「お？」

俺が尻餅をつく事は予想外だったのか牧野の剣は運良く俺の頭上を通過していき何故か妙に隙だらけの牧野が俺の前面に現れる。

正直、格好悪いな——と思いながらも手にした木刀で牧野の足を掬い取り転倒させてから手早く立ち上がりその首元に木刀を突きつけた。

「・・・勝者、新門下生」

まあ当然かもしれないが流瀬の顔には呆れ以外の物を見つけ出せなかった。

正直な話、俺は特に門下生などになる気は無かったのだがリハビリの継続先としては悪くないかもしれないと思った。勿論、道場に通うにはいくらかのお金が必要になるだろうが、その位ならば町で働き先を見つければ良いだけの話だ。

「ふゝむ。名無し君に剣術とはあまり似合わないな」

「悪かったですね」

「しかし、あまり熱心になりすぎて花輪ちゃんをないがしろにしてはいかんよ」

「なんで興味もない剣術の為に命の恩人をないがしろにせにやならんのですか」

「ほお」

「まあ道場に通うのはあくまでリハビリの一環ですから」

むしろ剣術道場に通い始めてから花輪との接点が以前より増えたくらいだ。剣術の稽古の方は手を抜いている訳ではないがそれなりといった所。仕事先の方は道場と平行して行うのでそれなりに大変だが順調といったところか。この分ならそれほど時間を掛けずに以前の調子を取り戻す事が出来そうだ。調子を取り戻してエリナ所へ帰る事が。

「それにしても『あの』名無し君が剣術ね」

「なんですか、あのつて」

「ん？ここに運ばれてきて2ヶ月位は、ずっと生死の境を彷徨ってうなされ続けていた君が、という意味さ」

「俺、そんなに重症だったんですか？」

「言っただろう？私が思わず匙を投げそうになったと。正直、助かる見込みは殆ど無かったのだがね。何故かさっき言った2ヶ月ほどで容態が急に回復し始めて・・・」

ポンと俺の肩を叩く医者。

「この通り剣術を習えるくらいには回復したらしい」

2ヵ月——言われてみれば診療所で目を覚ますまで何かずっと苦しい夢を見ていた気がする。正に奇跡的に助かったという事か。

「それで調子の方はどうなのかな？」

「調子と言われても道場に通うのはあくまでリハビリ目的ですから」

「違う違う。花輪ちゃんとの進展についてだよ」

「・・・俺に8歳の少女と何をしろと？」

この医者は相変わらずおっさんの思考をしていた。

道場に通って一ヶ月ほどもすれば流石の俺でも少しは見えてくる物がある。

それは例えば門下生達の中にほんの少しだけ見え隠れする共通点。そして思わぬ類似点などだ。

結果として考えると、この道場の本来の姿は流花さんが教えてくれた剣術に驚くほど類似点があるのだと言う事を知った。考えてみれば流花さんの格好も和服だったのだから彼女がこの辺りの出身で、この道場に近い流派を持っているのだとすれば不思議な事でもない。ただ惜しむべき点があるとすれば門下生のレベルの低さだろう。

初日からよく流瀬が門下生を怒鳴りつけていたが、それが無理もないと思うほどに門下生のレベルは低い。何気に流瀬の剣の腕がこの道場では一番マシであるという事が彼女の苛立ちに拍車を掛けていたのだろう。なんと言っても彼女は花輪と同じ8歳の少女なのだから。

そんな流瀬には悪いが俺は自分の方のリハビリを着々と進め、花輪と穏やかに会談し、ついでにこの道場の本質という物をいくらか勉強させて貰った。

この道場で教える剣術は流花さんに習った剣と驚くほど類似点があるが、いくつか異なる点も多い。例えば流花さんに習った剣は受身——というほどではないが返し技を狙うのが基本形であるのに対し、この道場の剣術は積極的に攻めを行うというものだった。その他にも構えや足運びなどいくつか相違点を見つけ出し自分なりに納得してある程度まで勉強する事が出来たと思う。その経緯がある程度まで正しかったと確信出来たのは、この道場の唯一の師範である流瀬の母——憐花くれんか>が長期の出張から帰ってきた時だった。

「名前は？」

「え？えつと日向正樹ですけど」

その憐花が帰宅したその日の内に俺は憐花に呼ばれ名前を尋ねられていた。

「よろしい。では日向正樹、私の相手をしなさい」

「え？え？でも俺・・・」

「うろたえるな。母上は新しく入った門下生とは必ず一度は試合をする決まりなのだ。貴様が特別などという事ではない」

「あっそ」

何故いきなり自分かと思ったが別に特別な事でもないらしい。リハビリの方も順調な事だし丁度良い。俺は師範の実力とやらを見せて貰おうと少し真面目に相手をする事にした。そして、それが驕りだと気付いたのは一秒後だった。

「な!？」

門下生が大した事が無いからといって完全に舐めていた。その憐花は試合が始まると同時に一瞬で間合いを詰めて強烈な一撃を俺に叩き込んできた!思わず、反射的に、流花さんの剣に切り替えて受けなければ一瞬で終わる所でギリギリ受ける事が出来たのはほとんどマグレと言って良かった。

だから無様な声を漏らしたのは俺でも憐花でもなく――。

「ば、馬鹿な」

一瞬で終わる事を予想していた流瀬だった。

「一番下っ端の門下生が母上の初太刀を受け止めるなど、そんな馬鹿な事が!」

しかし流瀬の予想を裏切って俺と憐花の試合は続く。初太刀を受けられたと判断した憐花は即座に切り返し再び俺に高速の斬撃を見舞う。

今度はまともに受けた。まともに受けて――本来の返し技を憐花に見舞う。それは読まれていたように易々と憐花に回避されてしまったが試合は勿論続行。

正直な話をすれば憐花は予想以上の使い手だった。こんな道場の師範をしているのは勿体無いほどの腕を持っている。しかし――惜しい。

「はっ、はっ、はっ・・・」

時間が経つにつれて憐花の息が上がり始める。決してそれは歳の問題や運動不足といった過失ではなく彼女は領域を知らなかったと

言うだけ。本当に惜しい。彼女がもし領域を知っていたなら、この程度の運動では息も切らさなかっただろうに。だが実際には彼女は領域を知らず、故に俺の動きを目で、肌で感じてから動く為に必要以上の神経を費やしスタミナを消費する。結果、試合開始20分ほどで――。

「あ」

木刀を俺に弾き飛ばされ俺の勝利が確定した。

ハッキリ言つて憐花に勝利してしまった事は失敗という他無い。

別に自分の力を隠していたつもりは無いのだが流瀬には大いに睨まれた。更に面倒な事に道場の師範代に命名されてしまつて更に――。

「弟子にしてください！」

花輪と、そして何故か流瀬が俺個人への入門を希望してきたのだつた。

まあ心情的に流瀬は分からないでもない。自分が最も強いと思つていた憐花が破れたのだ。ひたすらに負けず嫌いで上を目指す流瀬なら俺に従事する事を選んでも分からないでもない。分からないのは花輪の方。理由を尋ねると――。

「憐花さんと戦っている名無しさん、まるで母上のようにでした」

との事。よく分からないが花輪の家でも以前は剣術を生業にしていたらしく俺の戦い方が生前の母に重なって見えたのだそうだ。

「まあ別に良いけどね。但し俺のリハビリが終わるまでの間だぞ」

二人は異議を挟まなかった。

花輪と流瀬。特にどちらかを最優先する気は無かつたが花輪には流花さんに習つた剣を、流瀬には道場で修得した剣を教える事になった。流瀬は少々不満を漏らしたが俺が領域と呼吸の事を教えてやると俄然やる気になったらしい。俺が憐花に勝てたのはその二つの要素があつたからであると知つて、ならば自分がその二つを覚えれば、と考えたらしい。

まあ実際の話、花輪と流瀬は飲み込みがよく筋が良かった。8歳という年齢の為に身体的に不利はあるものの領域や呼吸と言った基本を教える事に何の問題も無く二人は瞬く間に俺の教えを飲み込んでいった。

約二週間ほどで領域と呼吸のコツを掴むくらいに。

勿論、俺に師としての才能など皆無と言って良い。しかし二人の飲み込みの良さと俺の物覚えの悪さのお陰で異常なほど早く修得出来たのは事実である。

何気に俺は物覚えが悪い為に自分で理解する為には細かいくらいに順序を掛けて修得する必要がある。だから俺には『理解出来ない』という事は物凄く理解出来るのだ。なので実は一度覚えた事なら俺の説明は意外に判り易かったりする。たとえ8歳の子供であろうとも。

Yの視点

勿論、日向正樹は気づいていなかった。

例え領域や呼吸を知らずとも憐花の実力は彼の師である流花と並ぶほどの物だ。決して偶然やマグレなどで勝てる物ではない。

日向正樹が憐花に勝てた理由。

それは単純にして明快。

日向正樹は以前よりも遥かに強くなっていた。

原因は？クロンとの戦いで本当の実践を知ったから？憐花の道場に通う事になって別アプローチから剣術を見直して自分の剣を知ったから？

それは確かに一因ではあるかもしれないが『原因』とはほど遠い。そもそも日向正樹は成長とは無縁の人間だ。エリナや流花は知らなかったかもしれないが日向正樹の成長はクロンと戦った時点で既

に止まっていた。

例えどれほどエリナや流花の指導が的確だろうと、それ以上に成長する為には『才能』が必要不可欠で、そして本当にどうしようもないほどに日向正樹には才能が欠けている。

だから成長が完全に止まってしまった日向正樹がそれ以上強くなる為には一つしか手段がなかった。

成長出来ないなら進化すればいい。

無論、進化など一言で言うほど並大抵のことではない。

進化は人間の体に想像を絶する過負荷を掛け、それを克服することと得られる。その過負荷が問題だった。

死ぬか生きるか。本当に瀬戸際になるほどの過負荷を受けて初めて選択肢が現れるほどの過酷な条件。当然、大抵の人間は進化ではなく安らかな死を選ぶ。

だが日向正樹には『選ぶ』という選択肢すら与えられなかった。クロンによって与えられた絶望的ともいえる死の洗礼。

その渦中であって日向正樹はひたすらに『頑張った』。当然だ。彼にはあきらめる事も逃げ出す事も選択肢がないのだから。『頑張る』以外に手が無かった。

だから安らかな死を放棄した彼は2カ月という生と死の狭間の苦痛という『過負荷』を克服した事により与えられる『進化』。それを手に入れる権利があった。

勿論、日向正樹は気づいていなかった。

自分が今立っているステージが師である流花と肩を並べる事の出る場所だとは。

「おはようございます、師匠様」

花輪は俺に弟子入りした日から俺をそう呼ぶようになった。流瀬の方はまあ意地っ張りなので曖昧な呼び方をして誤魔化している。そして――。

「モテモテだな、名無し君」

この医者には相変わらず俺を名無しと呼んでいた。まあ家なしの俺は診療所に居候させて貰っているので大きい事が言えないのが原因。一応生活費は働いて入れているが。

「師匠様は師範代なんですから道場に給金を要求すればよろしいのに」

「流瀬の所も無理な門下生を募ってやっと持ち直したんだ。あそこから金を取るのはなんだか気が引ける」

実際の所は門下生の前で憐花を打ち負かしてしまったので評判が落ちやしないか冷や冷やして要求出来ないのが実情。小心者と言う無かれ。

「ところで流瀬は？」

「あ。えっと・・・山籠りをすると行って裏山に出かけました」

「またか」

別に毎回流瀬が山籠りを計画している訳ではなく何故か流瀬は俺から一刻も早く卒業しようとするのだ。今回の事も恐らくその一環だろう。

「仕方ない、連れ戻してくるか。花輪、案内頼めるか？」

「お任せください！流瀬の痕跡なら既に領域で確保済みです」

優秀な弟子を持つと大いに助かる。ちなみに今の所、花輪は領域に秀でていて流瀬は呼吸に秀でている。性格的な差なのかもしれない。

ピョンピョン跳ねるようにして俺を案内する花輪を『可愛いな』
と思いつながら追いかけて流瀬の元へと案内されると――。

「やあ――！！！」

当の流瀬は岩を木刀で打ち粉碎している所だった。見事な呼吸だ。まあ呼吸を読むのに掛け声は必要無いが。

「おい。流瀬」

「む。何用だ」

俺が呆れながら声を掛けると流瀬は振り返り少し不機嫌そうに俺を見る。

「山籠りなんて後回しにして今日の授業を始めよう。さつさと道場に移動するぞ」

「ふん。勝手にすれば良からう。私はここで修行して・・・！」

何故それが判ったのは自分でも良く分からない。だが俺は気付いたら流瀬を思い切り突き飛ばしていた。

「き、貴様何を！」

突き飛ばされた流瀬は大いに不満を俺にぶつけてきたが俺の方はそれどころではなく――。

「ち！」

チクリと腕に刺さる痛みを無視して腕に張り付いた『それ』を掴んで遠くへと放り投げた。

「な、何だ？蜘蛛？」

「え？え？師匠・・・様？」

流瀬の検分通り俺が放り投げたのは蜘蛛だ。流瀬の上から下りて来て流瀬に取り付こうとしていた所を突き飛ばして庇った。予想外だったのは――。

「が・・・く！」

それが毒蜘蛛だったという事だ。

「やれやれ。相変わらず名無し君は無茶をするな」

「せ、先生！師匠様は、師匠様は大丈夫なのですか！？」

花輪と流瀬の両名に肩を貸されどうにか辿り着いた診療所で医者に診察をされた結果――。

「んゝ。正直な話をすればかなり良くないな」

本人を前にしてはつきりと言ってくれる。

「名無し君を刺した毒蜘蛛はハッキリ言ってかなり性質の悪い奴だ。

急速的に毒が回るくせに獲物はじわじわと苦しんでいくタイプ。これからドンドン状態は悪化していくだろう」

「げ、解毒剤はないのですか？」

「毒の元である毒蜘蛛を持つてくればあるいと思ったが、どちらにしても難しい。毒に関しては私の専門外なのでね」

「そ、そんな」

ガツクリとうなだれる花輪。

「まあ、そう悲観するな。人間死ぬ時は死ぬのだし生きる時は案外簡単に生き延びる。名無し君はあれほどの怪我から立ち直れたんだ、意外に今回も生き延びるかも知れんぞ」

気休めならもう少し言い方があるだろうに。それでは慣れている花輪は兎も角――。

「ふ、ふざけるな！生き延びるかもしれないではなく医者なら手を尽くせ！こ、こんな、こんな事でこの男に死なれてたまるか！」

俺に庇われてしまった流瀬は動揺して声が震えていた。

「しかし現状では毒が消えるまで名無し君の体力が持つ事を祈るくらいしか手がない」

「ほ、他に医者は居ないのか？毒の専門家は」

「生憎とこの町に私以外の医者が居るという話は聞いた事がないし毒の専門家は私が知る限りここから二ヶ月は掛かりそうな場所に住んでいる」

絶望的。例えば俺を運んで二ヶ月でその医者の下に着いても3度は死ねそうな時間が掛かる。

「兎に角、落ち着きたまえ。私も出来る限り手は尽くす」

勿論この医者に尽くせる手などが知れたもので、その夜から俺は延々とつなされ続ける事になった。

寝ても覚めても苦しみ続け医者に峠を告げられた日は息も出来ない苦しみの中ボンヤリと意識が混濁していた。

「こんな、こんなつもりじゃなかったのに・・・」

朦朧として苦しみすら忘れる苦しみの中、誰かが俺のベッドの横に座り懺悔をするような声で祈りを捧げている。

「私はただ対等の関係になりたかっただけなのに、こんな事になるなんて思ってた」

朦朧として視界すら定まらない。

「私に出来る事なら何でもします。だから・・・」
この少女は――。

「だから死なないで。師匠・・・様」

花輪――じゃない。

「な・・・がせ？」

声すら上手く聞き取れず呼び方も『師匠様』であつたにも拘らず、なんとなくそれは流瀬であるような気がした。

流瀬がこんな弱音を吐くのに少し戸惑つたが何の事はない。こいつは俺が苦しんでいるのは自分のせいだと思つているのだ。

そんな事ないのに。流瀬を庇つたのは俺の意思で俺が勝手にした事なのだから。だから――。

「だから、お前まで苦しむ必要は・・・無い」

苦しむのは――俺1人で十分だ。

「ふむ。今回こそダメかと思つたが存外しぶといな、名無し君」

「あのさ。その言い方だと俺が死んだ方が良いみたいない方に聞こえるから二人の前では言わない方が良いと思うぞ」

「気を付けよう」

峠を越えた翌日。未だに苦しみは残っているものの徐々に毒は薄れているらしく俺は医者に太鼓判を押されていた。

「それにしても本当にモテモテだな、名無し君。花輪ちゃんと流瀬ちゃんが連日見舞いに着ていたぞ」

「連日って俺どの位寝たきりだったんだ？」

「今日で丁度2週間だ。本当にしぶといものだ后感心する」

「2週間も」

それは、さぞかし二人に心配を掛けたのだろうと少々反省をしてみるが、この場合何に対して反省すれば良いのだろうか？流瀬を助けた事に対しての反省など論外だし毒に苦しみ続けた事に関しては流石に無理がある。

「んゝ。まあ良いか」

こうして折角助かったのだから今は過去を振り返るより生きている事に感謝しよう。俺がそんな前向きな結論を出していると、にわかに診療所が騒がしくなってきた。

「師匠様！」

そして声と同時に花輪が俺の元へと駆けつけて飛びついてきた。どうやら二人が見舞いに来たらしい。

「良かった。意識が戻られたんですね」

「ああ。もう大丈夫・・・らしい」

まだ完全に毒が消えた訳ではないが命の保障はされた。

「ふ、ふん。存外しぶいではないか」

俺に抱きついてくる花輪の数歩後ろから流瀬がぶつきらぼつにそっぽを向いて悪態をついているが――昨夜の事は覚えている。

「ほら。おいで」

「な、何を言つて・・・」

俺が流瀬に手を差し伸べるとあっさり動揺した。

「来てくれないのか？」

そして俺が少々弱気に攻めると流瀬は1秒2秒3秒我慢して――花輪の反対側から俺に抱きついてきた。顔を埋めているから確認出来ないが恐らく涙すら浮かべながら。

「モテモテだな、名無し君」

まあ、この医者のお台詞はある意味予想の範囲内だった。

毒が完全に抜けるまで更に1週間を要し、そこから更にリハビリ

を完了するまでに1週間を必要とした。そして――。

「ああ、そうだ。以前名無し君から頼まれていた事を昨日やっとなべてみたよ」

「それってつまり昨日まで調べる気も起こさなかったって事か？」

「細かい事を気にするな。それよりこれを見てくれ」

医者が示したのは、どうやら地図のようだった。

「名無し君が言っていたクライリンクと言う国なのだが今私達が居るのがここだとすると・・・」

医者が指した地図の位置は大きな大陸から東の位置に存在する小さな島国――丁度俺の故郷のような極東の外れにある島国だ。

「君の言うクライリンクはここにある」

そして医者が指したのは地図のほぼど真ん中。

「ちよつと待て。何でそんなに遠いんだ？」

地図の縮図を見ると軽く数百――いや下手すると千キロは離れている。

「そんな事を私に聞かれても困る。私は頼まれた事を調べただけだから」

まあ確かにその通りなのだが、それにしても遠すぎる。何故クライリンク国境付近に居た俺が千キロは離れていそうな、こんな島国に倒れていたのか。疑問は尽きないが考えるのは後だ。問題は――どうやって帰るか。

「歩いていく以前に海を渡らないといかんのか」

「一応定期船は出ているらしいぞ。この国も一応大陸と交友があるらしいからな」

言われてざつと計算してみるが船代だけで今の手持ちの金の半分は削られてしまう。その後、延々と旅をしなくてはならない事を考えると非常に痛い。

「もう少し路銀を稼がないといけないか」

「おいおい。名無し君には金の前に解決しなくてはならない事があるだろうが。あの二人、どうするつもりだ？」

「む。しかし流石に連れていくという訳にも・・・」

既にリハビリが終わるまでの師弟関係などと言えるほど薄い関係ではないが流石に連れていく訳には――。

「何か問題でもあるのか？」

「え？」

「流瀬ちゃんは兎も角、花輪ちゃんは2年前の大火事で両親を無くして流瀬ちゃんの家に取り取られて以来、天涯孤独の身だ」

「・・・知っている」

花輪本人や流瀬からではなく憐花からその話を聞いている。

「なら何を迷う必要がある？」

確かに花輪を連れていく事に抵抗はないし花輪も俺が誘えば二つ返事で着いてくるだろう。むしろ置いて行くと言ったら怒り出しかねない。しかし――。

「流瀬はどうする？」

俺が毒から復帰して以来、花輪は元より流瀬も大いに俺に懐いている。相変わらず意地っ張りな性格は直っていないが俺には素直に甘えてくるようになった。

「流瀬はあの道場の後継者だ。連れて行くと言えば憐花が・・・親が黙っていないだろう」

そして流瀬を置いて花輪だけを連れて行く場合、花輪は流瀬に負い目が出る。結果として旅は気まずいものになるだろう。

「んゝ。一つ聞きたいのだが・・・」

「何だ？」

俺の話を聞いて医者は数秒考えてから俺に一つの質問をしてきた。

「何処まで本気で言っているのかな？」

「・・・」

流石に沈黙した。

「少なくとも私の知っている名無し君はそんな大人しい性格じゃなかった筈だが？流瀬ちゃんが着いて行きたいと言うなら道場をぶち壊してでも連れて行く。私の知っている名無し君はそんな男だった

と思うが、私の勘違いか？」

「・・・」

俺とこの医者付き合いは実質的に言って3ヶ月に満たないものだ。そもそも俺は医者が言うほど剛毅な性格をしている訳ではない。元々が小心者なのだから勘違いである事を肯定する事は簡単だ。しかし――。

「まあ、それもそうだ」

もし『胆を決める』と言うものの機会であるなら、これがそうだったのだろう。小心者の自分を打ち捨て二人の求める理想的な師である事。そろそろ、それを本気で求めても良い頃だと思った。

第五章

航海に後悔する。

駄洒落ではなく俺は今本気でそんな気分だった。

「大丈夫ですか？師匠様」

「情けない」

憐花を説得し花輪と流瀬を俺の旅に同行させる事は思ったとおり、それほど難しくはなかった。問題だったのは――。

「き、気持ち悪い」

俺が船旅に適した体を持っていなかった事。航海初日から船酔いでフラフラになっていた。

「き、決めたぞ。俺は大陸に付いたら二度と船になんか乗らない。乗らないったら乗らないんだ」

「師匠様」

「情けない」

俺の後ろ向きな決意に流石に愛弟子二人も呆れてしまっていた。

二人の愛弟子に背中をさすって貰ったり冷やしたタオルを額に乗せて貰ったりしながらも何とか俺達は大陸までの船旅をこなし10日ほどの航海で大陸へと到着する事が出来た。

「ふ。地面についてしまえばこっちのものだ」

「・・・師匠様」

「何を威張っているのだ、何を」

まあ要するにそれだけ船旅が辛かったという事だ。根本的に俺には船は向いてない。

「さて。二人とも準備は良いな？これからかなりの距離を歩かないといけないからな」

「えっと。馬車などを使えば早いのではないですか？師匠様」

「はっはっは。花輪は面白い事を言うな。俺達にそんな余裕がある訳ないだろうが」

そんな無計画な行程をすれば3日で路銀が尽きる。

「誰かさんが要らない見栄を張らなければ少しは余裕があったのではないか？」

しかし、そんな俺を流瀬がジト目で睨んでくる。

「し、仕方ないだろう！俺はお前達の師匠なんだから。至少くらい見栄を張りたい時だってあるんだ」

何の話かというと要するに船旅を始める前に向こうで購入してきた俺の腰に差された一振りの刀の事だ。

本来であれば別に俺は木刀でも構わなかったのだが何故か花輪、流瀬共に継承者としての証であるという立派な刀を所持していたのだ。流瀬の方は普通に道場に受け継がれてきた物で花輪の方は憐花が成長するまでと預かっていた品らしいのだが――弟子二人が真剣を所持して師匠である俺だけが木刀というのはいくらなんでもバツが悪すぎた。

そういう訳で俺の尊厳を守る為に旅費の何割かを割いて自分用の刀を無理に用意してきたという訳だ。

「大体、憐花も少しくらい俺に選別をくれたって罰はあたるまいに」

「一応、私達にはそれなりの選別は渡されていますが・・・」

「例の奥義書か？」

「ええ。まあ」

流瀬の道場に代々伝わる奥義書と刀と同じく憐花が預かっていた花輪の家に伝わる奥義書。刀とその奥義書が憐花からの二人へと選別という訳なのだが――。

「継承者の証か何か知らないが、これはいくらなんでも無理だろ」

「まあ人間に可能な技ではないな」

正直な話、俺は奥義書に書かれた文字などさっぱり読めなかったので二人に訳して貰ったのだが書かれていた内容は無謀を通り越して不可能としか思えない内容の上に――。

「2冊ある意味がないし」

2冊の奥義書に書かれている内容は全く同じものだった。どうやら親戚という以上に花輪と流瀬の家に伝わる剣術は元々は一つの流派だったのだという事なのかもしれない。

俺や花輪達の装備は普段着にしている和服に、その上から雨露を防げる外套に背負えるタイプの鞆という出で立ちだったのだが――。

「困ったな」

そんな装備を整えたせいで完全に路銀が尽きてしまった。

「どうする気だ、一体」

「どうって稼ぐしかあるまい。路銀無しで旅は続けられないし、かといって金を分捕ってくる訳にもいかんし」

だから問題は何をして稼ぐか。

今回の経験から連れが二人もいる以上、予想以上に出費が掛かるのは分かった。だから前回と同じ金額ではなく、もっと多くの金が必要。それも俺の予定を考えれば短期間にだ。

「短期間でそれなりの金額を得られる仕事といえば・・・」

「賞金稼ぎとかでしょうか？」

「いや。聞く話によれば賞金稼ぎになるにはややこしい資格が必要になるらしい」

3人であれこれ相談してみるが、そんな都合の良い仕事はなかなか見つからない。

「まあ兎に角、次の町につくまでに考えておこう。こんな森の中で相談しても仕事をくれる奴も居ないだろうし」

俺達3人は目的地のクライリンクへと一直線に進んでいる為、街道を外れ普通なら避けて通るような森を突っ切っている最中だ。

「師匠様。その、私もお仕事をお手伝いいたします」

「ん。ありがたいけど心配するな。こう見えても一応少しくらいの甲斐性はあるつもりだぞ」

花輪が健気な事を言ってくれるが流石に8歳児に仕事を手伝わせ

る訳にもいかない。

「それは良いが気付いているか？」

流瀬に言われるまでもなく俺は花輪に目配せして二人を少々下がらせる。

「当然だろ。俺はお前の師匠なんだから、というか俺も花輪もとにかく気付いていたぞ。流瀬はもう少し領域の修行を積まないとな」
「む」

少しだけムツとする流瀬の頭を撫でて機嫌を取りながら俺は——俺達は接近する存在を心なしに構えて待ち構える。そして、それは俺達の前に姿をあらわす。

「はっ、はっ、はっ……」

息を切らしながら走りよってくる一人の女。

「あ」

その女はこの距離になつてやっと俺達の存在に気付いたのか一瞬ギクリとしてから左右を見回して——。

「こ、こんにちは」

不自然な挨拶をしてきた。

「こんにちは。そんなに急いでどこへ向かうつもりだ？」

「えっと。ちよつと急用で……きゃ！」

言葉の途中で女の悲鳴が響き渡る。悲鳴の原因は単純に俺が女の頭を押さえつけて引きずり倒したから。

「な、何を……ひ！」

女の言葉は最後まで続かない。今まで女の居た首のあたりを薙ぐような一閃を目のあたりにして。

『な！？』

第二の乱入者に花輪と流瀬が驚愕の声を漏らす。俺はギリギリ感付いていたが二人には少々感知が間に合わなかったらしい。

「今の太刀筋。いきなり首を落とそうとは物騒な事だな」

「その女は少々訳ありだな。悪いが手加減してやる訳にはいかん」

俺の言葉に当然のように答える襲撃者の男。スマートな体格と少

々たるそんな顔つき。町ですれ違ってもまず印象に残りそうにない相手だが――。

「なら別の場所でやって貰えるかな。こっちは一応子供連れだ」

「悪いがそんな余裕はない。見せたくないなら目を瞑らせておく事だ」

「俺は『失せる』と言っている」

「『断る』と言った筈だ」

少なくとも常人よりも遥かに感覚の優れた花輪と流瀬に接近を察知させなかったこいつが只者である筈がない。

どこまでも平行線の意見に俺の目が細まり、そいつの雰囲気が目に見えて冷えてくる。

「出来るなら手荒な真似は避けたい所なんだが・・・」

「同感だ。なら、さっさと女諸共何処かへ行くが良い」

ピリピリと感電しそうな雰囲気の中――。

「花輪！流瀬！その女を抑えておけ」

「え？ちよ、ちよっと！」

一人で逃げようとした女は俺の命を受けた花輪と流瀬に捕まって拘束される。

「一々癪に障る奴だな」

「同感だ。お前は一々俺の癪に障る」

お互いに目を細め睨み合う数秒。最初に動いたのはどちらだったのか――気付いたら剣閃が重なり乾いた音を立てていた。

俺と、その男の戦いの始まりだった。

理由を述べるなら、そんな物はきつとどうでも良かったに違いない。

ただ一目見た時からお互いがお互いを気に入らなかった。何故なのかという理由さえ分らないままお互いが理解した。

『俺達は相容れぬ者だ』と。

だから戦う。ただ気に入らないからというだけの理由で剣を、刀

を抜き放ち激しく激突する！

かなりの使い手であるという事は初めから分かっていた。俺が斬りかかると刹那の間で俺の視界から消え唐突に背後から現れる。人間離れした体捌きだが、こちらには領域がある。どういう訳か男の存在は酷く希薄で感じ取りにくいが感じ取れない訳ではない。かうじで背後に回りこまれたと察する事は出来るので体を180度反転して最小の動きで攻撃を凌ぎ反撃を繰り出す。

反撃は一度では終わらない。俺が反撃を繰り出すと男はその攻撃に対してさらに反撃を繰り出し俺は更にその攻撃に対して反撃を繰り出す。延々とそれが繰り返され且つ、どちらも引かない為に超高度な打ち合いが展開される。

意地の張り合いのような打ち合いは互角の斬撃を放ちお互いが弾き飛ばされる事で一休止となり次の瞬間には休む事無く男の姿が俺の視界から消え失せる。

左。

またもかうじで受けて反撃の応酬。そんな応酬が幾度となく繰り返される。何秒、何分、何時間？時間の経過を忘れるほど集中し打ち合いに没頭し勝つ為に腕を振り上げる。

「カルース！何をしているの！」

その攻防は唐突に掛けられた声によって一時的に中断を余儀なくされる。俺サイドに掛けられた言葉ではなく男サイドに掛けられた言葉によって。

お互いまだ余力を残したまま声の主である女性に視線を向ける。

「フレイスカ。少し待っている。今終わらせる」

「何を言って・・・」

「邪魔が入った。少しばかり手間取っている」

「手間取るって『狼月』団長で大陸最強のあなたを誰が手間取らせるといふの？」

狼月という言葉には聞き覚えはない。だが大陸最強という言葉は納得出来る。この男は、それが当然のように似合うくらい強い。

男が女性の方に視線を向けている間、俺の方も花輪と流瀬に視線を向ける。女を押さえつけたまま俺と男の戦いに呆然と見つめていたのだろ。その瞳には若干ながら不安の影がよぎっていた。少々手間取りすぎたらしい。

「花輪！流瀬！よく見ている。これから・・・」

だから、そんな不安を抱かなくてすむように――。

「これからお前達の師匠が『世界最強』である事を証明してやる！
」

その言葉を宣言した。

Yの視点

流石の日向正樹も薄々理解し始めているらしかった。

進化を果たした日向正樹の強さは師である流花と並ぶほどの物だ。しかし、この相手――カールス・マクドエルに関しては例外中の例外と言っている。彼は――大陸最強である彼は流花よりも遥かに強かった。彼は真正銘、大陸最強の男だった。

その彼と、どうして日向正樹が互角の戦いを演じる事が出来るのか？

日向正樹は既に第二段階の進化を終えていたからだ。

一体いつの間に？

答えは『流瀬を庇い毒蜘蛛に刺されてから復帰するまでの間に』である。

毒蜘蛛によって与えられた苦痛によって彼は以前と同じように進化した――わけではない。そもそも一度死の瀬戸際まで追いつめられてやっと進化するような彼に毒とはいえ同じ死の苦痛程度で進化

を望めるわけがない。

彼が第二段階の進化を起こすきっかけは一つだけ。

『流瀬の涙』がそれを可能にした。

別に流瀬の涙に彼を進化させる要素があつた訳ではない。単純に流瀬の感じていた日向正樹を窮地に追い込んでしまった罪悪感。

日向正樹にとって、それを目の辺りにさせられるのは自身が死の苦痛を味わうよりも遥かに『苦痛』だった。自分で自分を絞め殺して地獄に叩き落としてやりたくなるほどに。

だから進化した。

流瀬を、そして花輪を苦しませなくても済むように。彼女達が何一つ不安を抱かなくてすむように、その為に彼は強くなった。

師である流花を置き去りにするほどに。

戦いが再開される。

世界最強——別にそんな称号が欲しいとは思わないが花輪と流瀬の為なら名乗っても良いと思った。自分達の師匠は世界最強。そう誇れるように。

先制は男から。互角の戦いを演じる事が出来ているとはいえ身体能力に差があるのだから、これはもうどうしようもない。

先手を男に素直に譲り、横薙ぎの斬撃を頭を下げて回避。後に即座に左から刀を振るい反撃に出る。

「な！」

剣が通り過ぎ、体勢的にも回避不能だったはずの俺の刀を男はなんと——非常識にも右の肘と膝をぶつける事で白刃取りの要領で受け止めていた。

本当に人間か！？こいつ。

驚愕する俺に男は通り過ぎた剣を左手のみに持ち替えて斜めから振り下ろしてくる。

あ、まずい。

未だに刀を男の右肘と右膝に挟まれている為、刀を離して回避するという選択がわずかに遅れる。回避——不能。そう悟った俺はとっさに右手を伸ばして——。

「な！」

男の驚愕の声が漏れた。

別に意図した訳ではなかったが俺はとっさに伸ばした右手で男の剣を親指と人差し指で挟むようにして固定して剣が俺に届く直前の位置で力づくで止めていた。

「化け物か！」

お前にだけは言われたくない！

両者武器を封じられた状態ではあるが男は俺の刀を挟む為に右足を上げた状態。つまり片足で立っている。この好機を逃す馬鹿はいない！

「！」

わずかに身を屈めて男の軸足を狙った足払いは超反応で片足で跳躍するという離れ業で回避される。しかし、この程度の事ではもう驚かない。

飛び上がったついでに空いた左足で俺に攻撃を繰り出してくる男。それを両手を封じられた状態で、動ける範囲の少ない状態でなんとか回避し、男が着地すると同時のタイミングで——。

「「「が！」「」」

同時に頭突きをぶちかました！

あまりにも強力なぶつかり合いだった為に両者の額から血が噴き出すが、そんな事を気にしてられない。今の衝撃でお互い自由になった両手と武器を持って再び対峙する。

だが、ここで一つの転機が訪れる。男の持つ剣は一目で業物と分かるが俺の刀は二束三文の安物だ。その差が徐々に現れ始め、ついに——。

「あ！」

花輪の呆気に取りられるような声を共に半場から綺麗にへし折れた。
「はあ——！！」

好機と取った男は勢い良く剣を振り上げ――。

「げふ！」

俺の右拳が腹に突き刺さり苦悶の声をあげながら僅かに後退する。

「師匠様」

ほっとする花輪と流瀬の気配。

「ち！」

それとは対称に舌打ちをして俺を睨み付ける男。今の攻防で取り落としたのか俺の足元には男の剣が落ちており俺はそれを――迷う事無く遠くに蹴り飛ばす。

素手の相手に武器を持てば気が逸る。流花さんに散々言われてきた言葉を頭の中で反芻してスツと腰を落とす。

相手が武器を失う事は好機にはならない。好機は武器を失う事によつて起こる動揺にこそある。だから武器を失っても動揺しなかった俺は気を急いだ相手に一矢報いる事が出来た。だが戦いはこれからだ。

「ふ！」

素手の戦いが展開されると俺と男のスタイルがより鮮明に浮き出してくる。その形は綺麗に対称。男がアクロバットな動きで攻守を行うのに対して俺は最小限の動きで攻防を行う。

男が繰り出す拳を俺はわずかに体をずらし肘で手首を突いて軌道をずらす。その上で懷に更に一步踏み出し懇親の力をもつて腹に拳を付き立てる！

「――かは！――」

同時に男の腕が翻り俺のコメカミに直撃して両者数メートルほど弾き飛ばされて――意にも返さず攻防に戻る。

効いていない筈がない。男の一撃は強烈で打たれたコメカミから脳が揺らされ吐き気が止まらない。フラフラしそうな体を必死に意思の力で繋ぎ止める。

それは相手もきつと同じ事で吐き出しそんな胃袋の中身を必死に歯を食いしばって耐えているだけだ。

それから4度、俺は腹に拳をつき立てたが同じく4度コメカミだけではなく顎や頬を殴られた。

俺の顔はかなり酷い事になっていたが男の顔色も限りなく真っ青になっていた。流石に先は長くない。

俺は一転して攻勢に回り男との間合いを詰めカウンター気味に飛んできた拳をしゃがんで回避し起き上がる反動を利用して――。

「ごは！」

腹に懇親の一撃を突き立てるも結果はまたも相打ち。仰け反った俺は数歩後ろに下がり、そのまま倒れそうな体を無理矢理立て直して男を睨み付けた。

男もまた悶絶してもおかしくない一撃を受けてなお俺を睨み付け――。

「・・・」

数秒間睨み合った後、不意に『それ』に気がついて俺は不用意に男との間合いを詰めポンと軽く男の肩を押してやった。それだけで男の体は背後に傾き――ドサリと倒れた。

「気絶しているなら・・・素直に倒れやがれ。非常識が」

そう悪態について俺は――俺も前のめりに倒れて気を失った。

目を覚ますと体中が異常なまでにだるかった。

「よお。目が覚めたか？」

そして俺に最初に声を掛けてきたのは隣のベッドに横になっている男――確かカルースとか言う名前だったか？あの異常に強い非常識だった。

「何処だ、ここ？」

「狼月の医務室だ。あの後ぶっ倒れた俺達をフレイスが運び込んでくれたらしい」

フレイス。あの後からきた女の事だろうか。

「大丈夫ですか？師匠様」

5日もベッドに縛り付けられていたので体がだるくて仕方がない。毎日見舞いに来てくれた花輪と流瀬には悪いがまともな状態になるのにはもう少し時間が必要だった。

そんなフラフラの状態で砦の中を歩いていると不意に――。

「あ！」

上の方からそんな声が聞こえて声のした方向を見上げると――。

「きゃあ~~~~~」

「!!!!」

「で!？」

悲鳴をあげながら一人の女が俺の方へと勢いよく落下してくる所だった。

「ぐえ！」

そして丁度俺に馬乗りになるようにして着地した女は、あの時力ルースと共にいた女――確かフレイスだったか?――だった。それにしても――。

「お、重い」

「な、何ですって!」

思わず本音の出た俺を上に乗った女が睨み付ける。

「私の何処が重いつて言うのよ!」

「何処つて、そりゃ・・・」

俺は女を正面から見えて――。

「お前のその無駄にデカイ胸に決まってるんだろぅが!重いんだよ!早くどけ!」

「な!」

瞬時にして顔色を変える女。失言だったと気付いたのは自分の体勢が完全に不利であると悟ってからだった。

「なんですって~~~~~」

「!!!!」

「いて!ちょ・・・グーで殴るな!」

擬音としてポカポカという生ぬるい感じではなくゴスゴスと言う感じで殴ってくる女の拳を必死にガードしながら――。

「人が気にしている事を~~~~!!!!!!」

「何だ。自覚はあったのか」

「~~~~!!!!!!」

ますます激昂させてボコボコにされた。

「私は悪くないもん」

俺をボコボコにした女――フレイス「レイレイシアはツンとそっぽを向きながら俺の手当てを行っていた。

状況で言つと、この女が階段を踏み外して落ちた所に丁度俺が居て、ああいう状況になったらしい。

「だから階段つて嫌いなものよ」

「お前じゃ下が見えないもんな」

フレイスのかなり大きな目の胸を見ながら感想を述べるとギロリと睨まれたので口を噤む。

「ちよつと位強いからって良い気にならないでよね。狼月の真の實力は総合力にあるんだから」

「ちよつとではなく世界最強だ。ちなみに俺の真の實力は相手が複数の場合に真価を発揮するぞ」

ピリピリと火花を散らして睨みあう俺をフレイス。なんと言うか狼月と言う所は俺と反発するような奴の巣窟なのだろうか？

「まったく。折角時間が空いたからソフィアのお見舞いに行こうと思っていたのに。台無しだわ」

「ソフィア？」

フレイスが漏らした聞きなれない名前を鸚鵡返しに聞き返す。

「ソフィア」マクダエル。カルースの奥さんで私の親友よ」

「は？」

思わず間抜けな声を上げて思考が停止した。カルースの――奥方？
「あ、あいつ結婚してたのか!？」

「なによ。何か変？」

「だって、なんというか、あいつ・・・だって、なあ？」

「何が『なあ？』なのよ」

フレイスは溜息を吐きながらポツポツと事情を話してくれた。

ソフィア「マクダエル。」

カルースの奥方にして狼月の作戦参謀担当。が生まれつき体が弱いらしく一年の3分の2はベッドの上で生活しているとか。

「いらっしやい。フレイスと・・・えっと、どなたでしたか？狼月の人員は全て記憶しているつもりでしたが」

「気にしないで。ただの無神経な世界最強だから」

「あんな」

ついでなのでソフィアの見舞いに付き合っただが話の通り儂げで弱々しく顔色が悪い女性だったが――美人だった。

「あの野郎。上手い事やりやがって」

そしてマクダエル婦人のお腹は傍目で見ても分かるくらい大きい。要するに妊娠中らしかった。

「あの・・・」

「ああ。自己紹介が遅れてすまない。俺は日向正樹だ。立場は期間限定の居候と言った所で・・・世界最強だ」

「花輪ちゃんと流瀬ちゃんの師匠よ。こいつが」

「ああ。あなたが」

「いや、世界最強で・・・」

「お話はカルース達から伺っています。なんでも本気のカルース相手に引き分けたとか」

「断じて違う！あれは間違いなく俺の勝ち。俺が気絶したのはあいつが倒れたのを確認してからだ。だから俺の勝ち！」

世界最強として断言してしまった以上負けを認める訳にはいかない。俺がムキになって抗議するとソフィアはクスクスと笑い出す。

「ごめんなさい。でもカルースと同じような事をおっしゃるものだ

から」

「む。何だ、あいつ。負けた分際で図々しい」

「よく言うわ。私が運んであげなかったらあのまま野垂死にしてたくせに。それに今度戦ったら、きつとカルースが勝つわよ」

「阿呆。今度も何もあるか。俺はあいつとは・・・」

「二度と戦わん」

俺が本音を暴露するのと同時に重なるようにして背後から声が重なる。

「何だ。仕事があるんじゃないかったのか？」

「お前のように暇ではないが妻の見舞いに来る位の時間は取れる」

いつの間にか背後にいたのはカルース「マクダエル本人であった。

「ソフィア。具合はどうだ？」

「ええ。今日は少し体調が良いみたい」

「何よりだ」

そしてカルースを交えて幾つか話をしてから3人でソフィアの部屋を退室した。

「で？」

部屋を離れて数分。フレイスと別れカルースと二人になった時に俺はその質問を投げかけた。

「何だ？」

「とぼけるな。お前の奥方・・・いつまで持つ？」

「・・・」

沈黙するカルースは視線を反らしたが肯定の返事に他ならない。

「おかしいと思っていた。お前が追いかけていた女、狼月へのスパイだったらしいがお前のような奴が問答無用で斬り殺すような相手には思えなかったからな。原因はソフィアの容態か？」

ソフィアの容態は芳しくない。それが原因でカルースはイライラしていたと言う事だろう。

「医者が言うにはソフィア個人に関しては後数年は問題ない。だが、

「・・」

「出産となれば話が別か」

「ああ。ソフィアの体では出産に耐え切れない。よしんば産めたとしてもそれまでだ。どちらにしてもソフィアは出産と同時に命を落とす」

「つまり期間は出産までか。予定日は？」

「一応、一月後だ」

「対策は？」

「目下全力で搜索中だ。もっとも、これは既に数年前から続けてきた事だが」

「・・」

言い換えるなら絶望的という事か。

第六章

「手段がない訳ではない」

俺が動けるようになって一週間。ソフィアの出産予定日まで3週間を切った今日、カルースは一つの決意を口にしていた。

「天の尖塔というものがある。そこには、どんな病でも治す事が出来る万能の薬があるらしい」

「眉唾だな。信用出来るのか？」

「さあな。だが、これが外れだつたら他に手は無い」

カルースの話は御伽話に近い。しかし、そんな物に頼らなければならぬほど状況は切羽詰っているという事なのだ。

「俺が行ってくる。もしもの時は・・・」

「もしもの時は？」

「お前に頼むのは癪だがソフィアを頼む」

俺はスツと立ち上がりカルースに音もなく近づいて――。

「が！」

力の限りそいつの顔面をぶん殴った。

「て、てめえ！何をしゃがる！」

「阿呆か、お前は」

今のソフィアに必要なのはそんな御伽話に出てくるような魔法の薬ではない。必要なのは――。

「お前が側に居ずに誰がソフィアを支えてやれるって言うんだ？」

「し、しかし」

「じつとしていられないと言うなら足にナイフでも刺している。お前の役割はソフィアの側に居てやる事だ。そんな薬など・・・」

柄にもない。本当に柄でもないが――。

「俺一人で十分だ」

花輪と流瀬を狼月に預け俺は天の尖塔に向けて疾走する。場所自体は既に何十年、何百年も前から確立されていたようで道に迷う事はない。その行程、俺は不眠不休で走り続け直線距離で3日。その尖塔を前にした。

「何処が塔なんだよ」

地上から天に伸びる塔のような絶壁。確かに塔に見えない事も無いのだが――天辺が雲の更の上にあって全然見えない。

「これを登れって？冗談きついよな」

嘆息しながら俺は絶壁の淵に足を掛けて――跳躍する。俺は急いでいるのだ。いちいち手足を使ってよじ登っている暇はない。

俺は走ると変わらない速度で全力で塔を掛け上がる。駆け上がつて――。

「冗談は・・・見た目だけにしてくれよな」

丸一日登り続け息も切れ切れでへばった。不眠不休で既に4日以上。それに加え上に登るという行為は予想以上に俺のスタミナを奪った。おそらく走るペースだったのは地上から5000メートルからそこらまでの話。そこからは歩く程度のペースに変わり1万メートルを越えた時点で結局よじ登る羽目になった。酸素が薄いという事も原因の一つだ。

「くそ。何が世界最強だ！笑わせるな」

それでも俺は休まず登り続ける。

終わりが見えたのは登り始めて丸2日が経ってから。それまでの絶壁を覆す花畑に迎えられるながら俺はその上にうつ伏せに倒せる。流石にもう動けないが――。

「くー！」

休むのは今じゃなくても良い。休むのはソフィアに薬を届けてからでも遅くは無い筈だ。言う事を聞かない体に鞭を入れて俺は無理やり体を起こした。

「はあ、はあ、はあ・・・」

流石に地上から2万メートル以上離れると呼吸すら難しい。イコ

「ル疲労の回復が遅いという事。俺は酸欠と疲労でフラフラする体を引きずって花畑の中を歩き回り――。」

「止まりなさい」

『彼女』に、出会った。

「ここは神なる神聖な祝福を受ける大地。人間の立ち入って良い領域ではありません。早々に立ち去りなさい」

その言葉が届かないくらい俺は彼女に見惚れて言葉を失った。その位に彼女は美しく神々しかった。だが――。

「ここに、どんな病も治せる薬があるって聞いたんだが」
目的を忘れるほど俺は愚かではないつもりだ。

「人が病で死ぬというなら、それはその人の寿命です。天命を全うする事に逆らうのは自然の理に反しています」

「それは・・・」

その通りだろう。ソフィアの病が治らないからと言って人外の力に頼るのは逃避に他ならない。しかし――。

「そんなに物分りが良ければ、そもそもこんな所まで着ちやいない」
「なるほど。ならば、どうしますか？」

「一つだけ質問に答えて貰おう。薬は、ここに、あるのか？」

「はい」

「ならば力ずくでも頂いていく！」

俺は刀を――折れたままの安物の刀を抜き放ち彼女に向かい突きつけた。

戦いは戦いという型に収まらない戦いになり、それに反して戦いとは呼べないものだった。

「はあゝ、はあゝ、はあゝ」

5日の不眠不休に加え高度2万メートル以上上空――それを別にしても彼女は圧倒的だった。

「もう止めなさい。これ以上は命に関わります」

「それで引き返せるならこんな所まで来ないと言った！」

俺は折れた刀を手に再度彼女に挑み——今までと変わらず俺の攻撃は彼女の持つ銀色の剣により阻止される。普段なら剣の呼吸を読み剣諸共切断する所だが、どんな原理かその剣からは一切の呼吸が聞こえない。故に受けられ——。

「ならば戦えない体になって貰います」

「く！ぐか！」

返す剣で俺の刀を持った右腕ごと斬り飛ばされ鮮血が噴出する。

「さあ。これでもう貴方は・・・」

『戦えないでしょう？』という言葉で彼女は飲み込む。右腕を武器と同時に失い戦意を消失させるべき相手が『世界最強』の俺であった事から、その言葉を撤回するより他に無かったから。

「理由を聞いても良いですか？何故、貴方のような人が万能薬を求めるのです？」

「良い女だからさ」

理由はそれだけ。そして俺はそれ以上の理由を必要としない。

「なるほど。貴方は『戦士』だったんですね」

今まで構える事をしなかった彼女の腰がわずかに落ちて剣が斜めに構えられる。

「失礼しました。貴方を戦士と認め私も・・・」

そして彼女の瞳が細められ——。

「全力でお相手します」

本気を開放した。

彼女の事情

既に聖域への侵入者である彼は心身ともにボロボロで私が全力で相手をする必要は全くと言って良いほど見当たらぬ。

でも、それでも——ずっと待ち続けた人だから本気で来るなら全力で答えたと思うってしまったのだ。何千年も何人も立ち寄らない、

この聖域を訪ねてくれた初めての人だったから。人恋しさが募ったのかもしれない。

「御覚悟を」

彼の強さは人間からすれば最高レベル——もつと言えば規格外とさえ言える強さを持っていた。けれど、それはあくまで人間レベルでの話だ。そこに私は当てはまらない。神族第2位、神罰級第一位である私——つまり『神』と呼ばれる者の中で2番目に強い私からすると彼の強さは塵程度の物だから。

「はあ、はあ……」

でも片腕を失い尚戦意を失わないその瞳は私に何かを期待させる。

「我流、天剣奥義……」

だから、ますます手は抜けない。私の愛剣『封神の剣』セウリー・リオンに可能な限り最大の魔力を込める。一振りで天地を引き裂くほどの過剰な魔力を込めて——。

『霸王・天破！』

私の最大の奥義を持つて彼に怒濤の攻撃を仕掛ける。

仕掛けてしまつてから少し後悔した。せめて彼の名前を聞いて置けば良かったと思ったから。

だが発動した奥義は止まらない。『霸王・天破』は私が何千年という年月を掛けて完成させたあらゆる敵を斬り裂く『剛の剣』。最大魔力を込めて無数の斬撃を叩き込むそれは——。

「塵も残さず消えなさい」

文字通り敵を——彼を塵一つ残さず消滅させた。

奥義の余波により魔力の奔流が吹き荒れ全てを覆い隠す。

私は少しも沸いて来ない勝利感と倒れてしまいそうな喪失感を持つてそれを静かに眺め——。

「花輪流刀術・奥義……」

「え？」

我が耳を疑う。そして——我が目を疑う！
私の前で吹き荒れる魔力の奔流が——。

「その名は『龍型くりゆうか』！」

弾けて消えた！

「そ、そんな、まさか……」

しかも魔力の奔流を撥ね退けた彼は——無傷！私の奥義を受ける前に失っていた右腕さえも元通りになっでいて、そして——。

「え？」

再度、私は我が目を疑う。驚愕していたとはいえ戦闘態勢にあった私が——彼の姿を刹那見失った。気が付くと彼は私の目の前にいて——速——すぎる！

私は瞬時にその意識を刈り取られていた。

使う気は無かった。しかし使わずに生き延びる手段は無かった。

花輪と流瀬。二人の持っていた奥義書に描かれていた奥義はこうして俺の手に納まった。だが——。

「思ったより何ともないもんだな」

しかも花輪と流瀬に最後まで訳して貰って初めて知ったのだが流派の名は『花輪流刀術』。しかも奥義の名は『龍型』だ。何かとても因縁めいている感じた。

俺は緊張を解き溜めていた息を吐き出すと同時に——。

「ごふ！」

大量の血を吐き出した。

「ごほ！がは！」

疲労はない。それどころか失った腕どころか俺には怪我一つ残っ

ていない。体力も申し分ない。だが、それでも血は止まらない。俺は際限なく血を吐き出し続け――ああ、死ぬんだなと思った。

帰ったら花輪と流瀬の奥義書を始末しておかなくては。こんな危険なものをあの二人に使わせる訳には行かない。

だが、その前に――。

「無茶を、しましたね」

「何だ。もう気が付いたのか」

「ええ。誰かさんが手加減してくれましたから」

確かに俺は彼女を落としただけだ。

「何故殺さなかったのですか？先程の貴方なら私を殺しきる事も可能だった筈」

「さっき言わなかったか？」

「？」

力の入らない体を何とか起こして同じ言葉を紡ぐ。

「あんたが良い女だったからさ」

俺がソフィアを助ける理由がそれ以上必要ないのと同じように俺が彼女を殺さない理由はそれだけで十分だった。

「ところで、どうする？」

「どう、とは？」

「まだ続けるのかという事だ。この戦いを」

「それは・・・」

彼女は僅かに躊躇してから反対に俺に問い掛けてきた。

「続けると言ったらどうするつもりですか？」

「相手になる」

「どうやって？一度は不覚を取りましたが今の貴方なら私の敵ではない事は分かりきっている筈です」

「もう一度『奥義』を使う」

「それで今度こそ私を殺しきるのですね？」

「言った筈だ。あんたは殺さない」

「な！それではどうやって私から薬を奪うつもりですか」

「あんたが負けを認めるまで何度でも奥義を使って叩き伏せる」

彼女は驚愕に目を見開いて——そして呆れた。

「一度使っただけでその様なのに、そんなに何度も使えるのですか？その奥義」

「そんな事は知らん。ただ、あんたが負けを認めるまで何度でも使っ
てやるさ」

「死ぬ気ですか？」

確かに、あの奥義を何度も——いや、後一度でも使えば俺は死ぬ。
だが——。

「冗談じゃない。俺の帰りを待っている奴がいるんだ。こんな所で
死ぬつもりは毛頭ない」

「矛盾しています。貴方の行動には矛盾だらけです」

「何処が？」

俺は自分の行動を順序良く考えて見る。

「あんたに負けを認めさせて薬を貰う。その薬をソフィアに届ける。
それから花輪と流瀬を連れてエリナの元に帰る。全部予定通りだ」

「貴方の言う通りにしたら貴方は私に負けを認めさせるという時点で
死んでいます」

「俺は死なない。死ぬとしたら全部予定をこなしてエリナが先に天
命を全うするのを見届けてからだ。俺は誰より先に死ぬ気はない」

そこまで自分で断言してから気が付いた。ああ。俺はちゃんと最
初の目的通りエリナの下へ帰ろうとしているんだな、と。

それから暫く俺は彼女と睨み合っていたが不意に彼女が嘆息して
視線を逸らす。

「まあ良いでしょう。実際に先に膝を屈したのは私の方ですから負
けを認めて貴方に薬を差し上げます」

「そうか」

正直ほっとする。言葉通り何度でも奥義は使う気だったが出来る
なら2度と使いたくないと思っていたのだ。

「それで薬は？」

「そうですね。傍目には分からないかもしれませんが、ここにある花、全てが万能薬の材料なのです」

「この花・・・全部が？」

「もつとも、ここにあるのは全て『材料』であって薬にするには特殊な調合が必要になります」

「それは時間が掛かるのか？」

ソフィアの出産予定日まで2週間と少し。今の体調を考えると歸りにどれだけ時間が掛かるか分からない。なるべく急がなくてはならない

「いいえ。調合に必要なのはこの花ともう一つ・・・」

彼女は足元に咲く花を一輪摘むと、それを胸の前に掲げる。

「高位神族の霊子構造です」

「霊子構造？」

「この場合、私の命をこの花と融合させる事により万能薬を作る事が出来るのです。もつと言うならば私を殺し、その分解された霊子構造の降りかった花こそ貴方の求める万能薬となるのです」

それは、つまり――。

「ええ。結局の所、私を殺す事でしか貴方の求める物は手に入らないのです」

「あつそ」

ならば俺が取る手段は一つだけだ。

「邪魔したな」

彼女に背を向けてさっさと歩き出す。

「え？ちょ・・・何処へ行くのですか？」

「帰る」

「どうして？貴方にはどうしても助けたいと思う人が居るのではなかったのですか？」

「あんたを犠牲にするような方法なら論外、本末転倒だ」

俺は良い女を助ける為に万能薬を求めたのであって良い女を犠牲にしてまで求めようとは思わない。

「でも、ならどうするつもりなのか？何故、出会って間もない私にそれほど肩入れしようとするのです？」

「これからどうするかなんて決まってる。帰って違う方法で助ける方法を探す」

「そんな無茶な」

無茶なのは百も承知。だが他に方法が無い以上取れる手段はこれしかない。

「それに。出会って間もないのはソフィアも一緒だ。俺はソフィアに出会ってまだ一週間足らずだからな」

「な！？そんな人の為に命を掛けるのですか？」

「それも言った。俺は命を掛ける気などない」

帰って当然。それが俺の掲げた世界最強という男の姿だ。

「ふう。貴方の言う事は無茶ばかりですね」

「悪かったな」

少しは自覚している。無茶だという事は分かるが既に俺は世界最強を宣言してしまったのだから少なくとも意地を張ってでも守らなくてはならない。

「分かりました。最初からこうすれば良かったのですね」

「何をするつもりだ？」

「要するに貴方が私を殺せないなら・・・」

彼女はスツと花を握り締め、そして――。

「私が私を殺せば良いのです」

「な！？待て、それは！」

奥義により回復した体で彼女に駆け寄ろうとするが――。

「ごふ！」

再び血を吐き出し多々良を踏み前進が遅れる。

「く！」

だから間に合わない。俺が駆けつけた時には彼女は光の粒子となつて花に降り注ぎ、俺の体をも光の粒子で包み込んでいた。

「くそ！」

何が世界最強だ。肝心な時に何も出来やしない。

俺は彼女の残した花の種のような物を子ビンに入れ踵を返して帰路を急いだ。悲しむのはソフィアに薬を届けてからで良い。

「お、おい。大丈夫かお前！フラフラじゃねえか」

「五月蠅い。ソフィアは・・・何処だ？」

奥義の反動という物は俺の予想を遥かに上回って大きく、俺が狼月へと帰還するまでに残りの日数をほぼ使い果たしてしまった。

「ああ。さつき陣痛が来て・・・」

「まだ生きているんだな！これ・・・を」

そして、そこで俺の意識は完全に途絶えて消えた。

『本当に無茶をする人ね』

ゆったりと漂う何処かで俺は誰かの声を聞いていた。

『何度でも使ってやるなんて言って置いて奥義を一度使っただけで限界を超えちゃって居るじゃない。このままじゃ貴方死んでしまうわよ』

それは困る。俺が死ぬのはもっともつと後。俺が大事な人の全てを看取ってからじゃないと――。

『そうね。いつだってきつと残される人の方が辛いものね。貴方は自分と大事な人が一方しか生き残れない状況になったら真っ先に大事な人を殺すんでしょうね。残された者にしないように』

そんなの、その時になつてみないと分からない。

『そうね。貴方はきつといつだって目先の事しか見ていないものね。先の事はその時になつて考えるのでしょうかね』

そこまで考え無しじゃないと思うけどな。

『嘘よ。貴方は目の前に大事な事が転がると後の事は放り出して目先の事に集中しちゃう人よ』

そんな事を断言されても――。

『だから。貴方は私が助けてあげるわ』

そんなの、どうやって――。

『それと、あの子の事をよろしくね』

あの子？

目が覚めて覚醒すると同時に俺はベッドから飛び起きた！

「し、師匠様？目を覚まされたのですか？」

「花輪！あれからどうなった？えと、その・・・そうだ！ソフィアはどうなった？子供はどうなったんだ？」

「えっと、その・・・」

思わず花輪に攻め寄ってしまったが花輪の困り顔を見て反省。俺が花輪を困らせてどうする。

「こほん。すまん、少し取り乱した」

「いえ。ソフィア殿は無事です。それにお子さんも無事に生まれました。ただ・・・」

「や、やっぱり何か問題があったのか！？」

「いえ。その・・・」

結局、俺は花輪に詰め寄って――。

「そんなにいじめちゃ花輪ちゃんが可愛そうですよ」
「え？」

澄んだ声の持ち主にやんわりと静止を掛けられた。この声、何処かで聞き覚えが――。

「おはようございます。やっと目が覚めたんですね」

「・・・ソフィア？」

聞き覚えがあつて当然だ。それは彼女――ソフィア＝マクダエルの声だったのだから。

「えっと。起きていて大丈夫なのか？」

「はい。何故か体が今までに無いくらい軽くて気分が良いんです。生まれ変わったみたいに」

「そ、そう」

確かに以前のソフィアに比べて顔色が良く生命力が満ちているような印象を受ける。

「それより。2週間も眠り続けていた貴方を花輪ちゃんが看病してくれていたのですから、もっと彼女を労って上げなくては駄目ですよ」

「そ、そうか。花輪、すまん」

「いえ。私は当然の事をしたままで」

「しかし俺が2週間も寝て・・・2週間!？」

思わずガバッとソフィアを振り返る。

「はい。貴方は私が出産した日から今日までの2週間ずっと眠り続けていたのですよ」

「そ、それは、また」

以前の一年以上も眠り続けていた事といい俺ってなんか長期で眠り続けるネタが多い。

「それで体調の方は大丈夫ですか？」

「ああ。これといって悪い所は・・・」

ベッドから身を起こそうとして、ふと自分が何かを握り締めている事に気付いた。

「あ。これ」

それは白い鞘に収められた銀色の剣。彼女が持っていた彼女の剣。

『あの子の事をよろしくね』

ふと思い返すは夢ではない夢。

「剣ですか？師匠様いつの間にそんな物を手に入れて・・・」

「日乃森くひのもり」

「え？」

「コイツの名前は『日乃森』だ。たった今俺が決めた」

「はあ。日乃森ですか」

「ああ。そう日乃森だ」

神剣『日乃森』。彼女に託され任された以上俺が守っていくべき連れが一人増えたと考えておくべきだった。

第七章

「それじゃ子供の名前は『紅葉』で良いんだな？」

「ああ。何日も悩んで考えたんだ。俺にこれ以上の名前は思い浮かばない」

ソフィアが産み落としたカルースの子供は女の子だった。そして何故かその子の名前を俺が命名する事になってしまっていた。

「『紅葉』。うん。貴女は今日から紅葉よ」

それというのもソフィアが頑として譲らなかったらしい。子供の名前は俺に命名して貰うと俺が目覚めますまでの2週間ひたすらに待ち続けていたらしい。

「なんだか自分の子供に命名するみたいで照れ臭いな」

「俺の子だからな。やらないぞ」

「分かってるっての」

子供が生まれてからカルースは紅葉にかかりつきりだ。余程子供が無事に生まれてきたのが嬉しかったのだろう。

「紅葉ですか。良い名ですね」

「ふん。コイツにしては悪くない命名だ」

花輪と流瀬もソコソコに気に入ったようだ。頑張つて考えた甲斐があった。

「ふむ。関連付ける訳じゃないが俺に子供が出来たら『桜』とでも名付けるかな」

「子供を生んでくれるような女でも居るのか？」

「居る・・・ような、居ないような」

エリナはどうだろう？違和感はないが子供を生むという事に対してなんだか妙にマツチしない組み合わせの気がする。

「それよりこうして一段落したんだから少々相談があるのだが」

「ん？」

「ハッキリ言って金がない。仕事をくれ」

直球でカルースに頼み込んだ。元々俺達は路銀を稼ぐつもりだったのだから、この際狼月で雇用して貰って仕事を工面して貰うのが早い。

「薬代というならしっかり払ってやるぞ。これに関しては流石に頭が上がるん」

「あれに関しての料金は無しだ。俺の方に貰う訳にはいかん事情がある」

薬は『彼女』そのものだ。それを金で売ったり買ったりをする気にはなれない。

「ふむ。そういう事なら仕事を工面しなくてもないが、お前団体行動って取れるか？」

「無理」

カルースの質問に俺は即答する。

元々花輪流刀術は多対一を前提として組み上げられた剣技という事もあるのだが、そもそも俺は団体行動が苦手なのだ。もともと、それじゃ何が得意なんだと言われても何も浮かばない悲しい性なのだ。

「個人戦闘力が高くても、それじゃうちの仕事は任せられん。ここはまがりなりにも傭兵団だからな」

「いや。別に傭兵の仕事を回せという訳じゃなくて他にも何かあるだろう？」

「何かつて？」

「掃除とか洗濯とか。料理もそれなりに得意だぞ？」

なんと言ってもエリナにしっかりと叩き込まれた。

「まあ、お前が良いなら、それで良いけどな」

呆れるカルースを他所にソフィアはクスクスと笑い続けていた。

狼月の仕事は忙しい。

まあやっている事は雑用なのだが、それでも忙しいのだ。

朝起きて朝食を作り、昼までに掃除洗濯を終わらせ昼ご飯を作り、夕飯までの間に花輪と流瀬に剣術の手解きをして夕飯を作る。それが俺の専らの生活なのだが――。

「何て言うかさ、あんたって世界最強のプライドとかないの？」

「プライドで飯が食えるなら俺は一日中威張ってふんぞり返っているわい」

事あるごとにフレイスがちょっかいをかけるというか構ってきた。まあ、たまに手伝ってくれたりするので助かっているのだが、その魂胆が少々読めない。

「それよりお前は俺と違って正規の狼月の団員だろう？こんな所でサボっていて良いのか？」

「良いのよ。狼月は大陸最強の傭兵団よ。その狼月が目を光らせているんだから早々戦争なんて起きないわよ」

「暇なのが平和な証拠か。まあ長らく暇である事を願って手伝って貰うか」

「初めからそう言えばいいのよ」

フレイスは今日も機嫌よく手伝ってくれるが――状況が一変するのはその日の午後だったりする。

「厄介な所に目を付けられた」

渋い顔をしたカルースが会議の場でそう漏らしていた。まあ俺は会議に参加するのではなくお茶汲みに来たただけなのだが余り宜しくない状況のようだ。

「軍事大国エミナル。戦争によって利益をあげて来た国にとって確かに狼月は目障りな事この上無いだろうな」

戦争を事前に消火するのが狼月の理だ。そういう国にとって確かに狼月は面白くない存在という事になる。

「うちの同盟国家は多いが相手がエミナールとなると、どれほどの国に協力を求められるか」

狼月は確かに大陸最強であり同盟国家も多いが実質的な狼月の戦力は3千に満たない。対して軍事国家としての兵力は10万を超える。その全てが投入されるという事は無いだろうが物量が違いすぎるといのは明白だ。この上、同盟国家の協力を得られないとなると――かなり上手くない状況という事だ。

「フレイス。エミナールの進軍状況は？」

フレイスはああ見えても狼月の情報官制担当である。

「分かっているだけで6万以上。正面からぶつかったら物量の違いに一瞬で崩れる数よ」

「同盟国の支援は？」

「21国家中4国家。期待だけの数字なら支援兵は5千と言ったところね」

「合わせて6千5百か。実質10倍とはな」

狼月の戦力は3千と称したが実質的な『戦力』と言う意味ではその数は半減する。単純に非戦闘員が半数を占めているからだ。戦争を未然に防ぐのに必要なのは的確な情報と迅速な行動力だけで良い。狼月は戦争をする為の傭兵団ではないのだから。

「ソフィア。策は？」

そしてソフィアは作戦参謀担当。狼月の頭脳と言っても良い存在だが――。

「少し、考えさせて貰って良い？」

そのソフィアにして言いよどませる絶望的戦力差が展開されている訳だ。

「そうか。なら非戦闘員の避難を優先して始めよう。戦えない者は迅速に避難を開始する事」

それまで傍観していた俺が、その言葉にピクリと反応する。

非戦闘員は避難？それはつまり――ソフィアや紅葉も？

「権限があるとは思っていないが一つ質問させて貰って良いか？」

「何だ？」

「俺と花輪と流瀬は非戦闘員に含まれるのか？」

「ああ。お前は狼月の団員ではない。だから速やかに砦から避難しろ」

「ああ。好きにさせて貰う」

それだけ聞ければ十分だ。

俺と花輪、流瀬は明日の明朝避難を開始する事になる。

ソフィアは狼月の重要度から明後日あたりになるだろうか？エミナールの行軍から言って戦いは3日後と予想されているので十分間に合うのだろうが——俺にとっても都合の良い日程である。

「何処かに行くのか？」

「ああ。今日の分の仕事は早めに終わったからな。少し散歩に行つて来る」

「そうか」

出かけにカルースに見つかったが特に問題は無い。カルースとしてもこの絶望的な状況を打開するのに手一杯だったから俺が何をしようとしているかなど思いも寄らなかったのだろう。

「さて。面倒な事考え付いちゃったな」

俺は一つ嘆息すると正面を向いて駆け出した。

エミナール皇女の事情

最初に一つ公言しておく。私は戦争が大好きだった。

そう。戦争によって益を得ていた事とは別に戦争というものが私は大好きだったのだ。策を考え、兵糧をかき集め、敵国の攻略に寝る間も惜しむ。私はそんな戦好きの皇女だった。

だから、その日も準備は万端。頭に幾通りもの作戦を展開させて我が国の6万の兵士を引連れて邪魔な障害を叩き潰す事だけを考えていた。

寝ても覚めても戦争の事ばかりを考え、そして最高の案を惜しみなく公開して私は確実な勝利を確信していた。そう。確信していた――答だった。

「姫。第1大隊から緊急の伝令が到着しました」

「第一から緊急？何よ、それ？第一は今頃一番前を行軍中でしょう？何でそんな所から直接私の所に伝令が来るのよ？」

通常、伝令と言うのは第一から第二、第二から第三と言うように伝言ゲームのように回ってくるものだ。人だけではなく馬の疲労なども考えて効率よく伝令をまわす為に。

「だから緊急と言う事なのでは？伝令を通しますか？」

「当たり前でしょ。これでつまらない用件だったら、そいつ打ち首にしてやるわ」

私は多少憤慨しながら伝令を私のテントに入室を許可した。

しかし、その伝令と言うのが厄介で言う事が支離滅裂ではつきりしない。挙句、苦勞して聞き出した情報が――。

「はあ？壊滅？あんた少しは常識でものを考えなさいよね。大隊一つに付き三千の兵がいるのよ？そのどれが壊滅したって言うのよ？」
「で、ですから」

伝令の兵は切羽詰まっているのか言葉がなかなか出てこない。おまけに出てきた言葉が――。

「第一から第三大隊は自分を残して壊滅致しました」

「あんた頭どうかしてるんじゃない？それとも夢でも見てる？」

三千の兵が三大隊。合計九千の兵が壊滅？朝まで元気に進行している姿を、この私が確認しているのだ。

「もう良いわ。そいつ用無し。どっかにやっちゃって」

そして私は馬鹿らしくなって兵を呼んでそいつを放り出した。人が楽しく眠っている時を邪魔してくれたのだから当然の罰だと思った。だが――。

「さてと。目が覚めちゃったから少し会議でも開こうかな。ちよっ

と主要な面子に集合掛けて」

「はい」

その私の命を受けて迅速に行動する副官。悪くない。悪くないが――。

「遅いわね」

20分以上経っても一向に誰も現れる気配が無いと流石にイラだつた。

「つたく！どいつもこいつも」

仕方ないので私は自分で起き上がりテントの外へと出て――思い切り後悔した。

「え？」

むせ返るような嫌な匂い。それがテントを一步出た瞬間に猛烈に私の鼻に届いた。

「何、これ？」

思わず一步、二歩と歩みを進めて三步目で何かグチャグチャした物を踏みつけた。とても嫌な感触のする物。闇に目が慣れない目で慣れたくないのに自然と目は慣れてきて――。

「ひ！」

自分が踏んでいる物がさっきまで私の副官と呼ばれていたものである事を悟って鳥肌が立った。

「何、何、何？何であんた死んでるのよ？」

死。それを言葉にした事で強く意識して途端に恐怖が湧きあがってきた。

「誰か。誰か居ないの！？」

半狂乱になって私は泣き叫ぶように人を求め――そして見た。

「う・・・そ」

この野営地には私専属の中隊が居て、その数2千の兵が私を守る為に交代で見張りながら待機していた筈だった。なのに気付いたらこの周囲に居るのは私一人なのだ。いや他にも居る事は居るのだが、

だつて——。

「何で死んでるのよ」

その2千の兵全て一人残らず斬殺されていた。恐怖に迫る自分自身を誤魔化して私は思考に没頭する。それでもなければ正気を保てない。だつて考えても見て欲しい。2千の兵だ。幾ら夜だからつて2千の兵が殺されて、いや殺される前に騒ぎの一つも起きていない。なら考えられる事は一つだけ。2千の兵は斬殺されたのではなく——暗殺されたのだ。何者かに。2千の兵一人にすら気付かれる事無く最後まで殺しきつた暗殺者。

「！」

そこまで考えた時点で自分の思考に鳥肌が立った。もし自分の推察が正しいのなら——例えば自分の副官が殺されたのはいつだろう？だつて20分前まで私の側に居て話をしていて——。

「ひ！」

考えたら居てもたつても居られなくなった。

私は闇雲に一目散に走り出す。何処へ？何処でも良い。何処か人の、生きている人の居る所へ！

走り出して3分も行かない内に私の走りを止める。最悪の展開ではなく最良の展開。ついてる。向こうから灯りが見えて、そして複数の足音が近づいてくる。あれは間違いなく私の隊の兵士だ。全滅じゃなかった。周囲を探索していた隊が存在したのかもしれない。

「ちよつと。ねえ」

私は喜び勇んで兵士達に近寄り——。

「え？」

目の前でその首が飛んでいく。

「あれ？え？ちょ……なんで？」

折角、生きている人間に会えたのに——死んでしまった。だから私の目の前に居るのは——。

「だ、誰？」

異国風の服を身に纏い銀色に剣を振るう者。昼間に見れば壮麗に

写ったかもしれないが今の私には――。

「し、死神？」

赤きを染める死神。伝承に曰く『彼の者は如何なる時も赤い血の夕焼けを連れるという』。故に彼の者の名は――。

「黄昏の・・・死神」

その時点で私は恐怖で腰が抜け地面に倒れて気を失った。

だから私は戦争が大好き『だった』のだ。

戦争の恐怖を知らなかった愚かな私は戦争の恐怖を知った途端、戦争が怖くて怖くてたまらなくなった。

だから私は戦争が好き『だった』のだ。

「だり」

都合一夜にして1万1千の人間を斬り殺した俺は流石に体がだるくて狼月の庭で日向ぼっこ宜しく大の字になって寝そべっていた。その俺に――。

「幾らなんでもやり過ぎだとは思わんか？」

カルースが少し不機嫌な声で話し掛けてきた。

「何が？」

「狼月を救ってくれた事は感謝する。だが幾らなんでも被害が大きすぎた。お前は1万1千の兵士を殺しただけかもしれないが1万1千の兵士には1万1千の家族が居ると言う事なんだぞ」

「お前、何勘違いしてるんだ？」

だから俺はカルースの勘違いを寝そべったまま訂正してやる。

「お前も言っていただろう？俺は狼月の団員じゃない。なら俺が狼月の為になどに働く訳が無いだろうが」

「つまり？」

「折角子供が生まれたばかりなのに行き成り引越しじゃ都合が悪い

「だろ？」

「お前……」

狼月の為ではなくソフィアと紅葉の為に体を張った。それだけだ。
「それに1万1千の兵と家族と言ったけどな」

「あ？」

「俺はそんな物よりソフィアと紅葉の方がずっと大事だ」

「……」

カルースは数秒沈黙すると――。

「格好付けやがって。礼は言わないからな」

「当たり前だ。人を殺して礼を言われてたまるか」

どんな理由があれ人を殺すことは害悪。許されざる最大級の悪事
と言つて良いだろう。それで賃金を得たり感謝されるような事は御
免被る。

「で、その後ろのは？」

とつくに気付いていたがカルースの背後にはカルースの背に隠れ
るように小さな人影がこちらを伺っていた。

「ああ。うちの同盟国のお姫様だ。正確に言うなら狼月に領土を貸
してくれている国のお姫様。更に言い換えるなら本来今回の戦争で
真つ先に叩き潰される筈だった国のお姫様だ」

「で？」

「国を救ったお前に感謝の気持ちを示したいんだと」

「さつきも言つたが不要だ。人を殺して感謝される気は更々ない」

「だ、そうだ」

カルースは肩を竦めて背後のお姫様――まだ12、3歳くらいの
少女を仰ぎ見る。

「はい。でも貴方が感謝されたくないのは貴方の事情で私が感謝し
たい事は私の事情ですから」

「あゝ」

つまり感謝されたくないと言つるのは俺の我侭で、感謝したいと言
うのはお姫様の我侭だと言いたい訳か。

「確かにその通りかもな。俺自身は感謝などされる気はないが、あんたが勝手に俺に感謝するのを止める理由にはならない」

「はい。ですから貴方がどう思おうと私は貴方に感謝しています」
「そ」

俺は寝転がったまま淡泊に返事をして会話を終えるつもりだったがカールースの背後に隠れるようにしていた少女の更に背後。そこに花輪や流瀬と同じ年くらいの少年が隠れている事に気付いた。

「あ」

少年は俺が気付いた事に気付いたのだろう。オズオズと俺の前に出て――。

「あの。で、弟子にしてください！」

「は？」

いきなり弟子入りを希望してきた。

「すみません。この子は私の親戚の子なのですが貴方の話を聞いたら憧れてしまつて」

随分と大人びた喋り方をする少女は少年を困つたような目で見て俺に伺いを立てていた。

「あゝ。悪いが俺には既に可愛い弟子が二人ほど居てね。金輪際俺はその二人以外に弟子を取る気はない」

「あ」

目に見えて少年が落胆するのが分かる。

「が。折角弟子入りを希望してくれたんだから無碍に断るのも忍びない。俺の弟子にする訳には行かないが・・・」

チラリと横目で『そいつ』を見て――。

「俺ほどではないが大陸最強と言われている男に俺から紹介してやる」

「な！？待て、お前・・・」

「何、こいつの強さは俺が保障してやる。間違いなく剣技に関しては俺と互角に渡り合える数少ない使い手だ。しかも人を纏める事に長けているから俺より教える事に関しては期待出来る上に俺に借り

があるから絶対に断れん」

「て、てめえ」

「ま、そういう事だ。頑張れよ」

「ち」

そしてカルースは肩を竦めて少年と去って行き俺はそれを確認してから静かに立ち上がりゆつくりと近くの森の中へと歩き出した。そして大分森の奥まで来て周囲に誰も居ない事を確認すると――。

「かは！」

体を両腕で抱えてガタガタと震え出した。

人間、そんなに簡単に変わるようなら苦労はしない。1万1千の人間だ。それを俺が斬り殺した。想像しただけで体の芯から震えが沸いてきて全身が寒気で凍りつきそうになる。

「く。うう」

虚勢を張り続けていたものが一気に崩れて情けないと言ったらあやしない。こんな所を他の誰かに見られる訳には行かない。俺は世界最強なのだから。

「く。エリナ」

エリナに会いたい。エリナにこの寒さを暖めて欲しい。人前では見せられない俺の弱音を震えながら呟き――。

「誰だ！」

背後の茂みに迂闊にも人が近寄ったのに気付くのが大幅に遅れてしまった。

「あ。その・・・ごめんなさい」

「ソフィア」

現れたのはソフィア「マクダエルだった。

「えっと。大丈夫？」

「な、何だが？」

今更だが誤魔化す。いまだに体は震えて顔色は真っ青、脂汗を過剰に掻いていても誤魔化さなくては。俺は世界最強なのだから。

「色々。色々我慢しているみたいだったから」

「何がだ？俺は何も我慢なんて・・・」

「良いから！」

グイとソフィアが俺を抱き寄せる。俺は何の抵抗も出来ずにその腕に捕まり――。

「色々、色々してくれているのは分かった。だから少しくらい私だつて、私だつて分かるんだから」

「な、何の話だ？」

「だから。だからね」

抵抗も出来ずに抱きすくめられたまま――。

「私にだつたら甘えても良いよ」

「！」

ヤバイ。ヤバイと思った。急いでソフィアを引き剥がして森の奥へと逃げ込むべきだと思った。

「私だつて人妻だけど年頃の女の子なんだから」

「あ」

ソフィアの年齢は18。その意味で考えれば俺と同年。そして分かれたエリナと同年の少女だった。

「師匠様？何かあったのですか？」

「え？何が？」

「えっと。何かギクシャクしているような」

「そ、そうか？ちよつと疲れたからかな？最近色々あったからな」
「そうですか？」

まあ、色々あったのだ。大人の事情と言うか何というか。

「それにしてもソフィア殿は本当に元気になりましたね」

「え？」

いきなり考えていた事を指摘された気分になってギクリとする。
「普段も元気になりましたが今日は特に機嫌が良さそうでした。
何か良い事でもあったのでしょうか？」

「さ、さあ？」

『大丈夫だから』というソフィアの声が頭の中で反芻される。なん
というか、まあ大丈夫なのだろうが、大丈夫、大丈夫。

「何が大丈夫なのですか？」

「うえ！？」

声に出していたらしく花輪が怪訝な顔をして俺を見つめていた。

「いや、まあ、ちょっと、色々、な。うん、大丈夫、大丈夫」

「はあ」

結局、花輪は頭には始終『？』マークが付きっぱなしで俺を眺め
ていた。

「おはよう、正樹さん。今日も良い天気ですね」

「え？ああ、そうだな」

あれ以来ソフィアは俺を名前で呼ぶようになった。まあ『さん』
付けだが格段に距離が近くなった気がする。

「ところで前に言った話、考えてくれました？」

「ん？いや、やっぱり俺はもう少し金が溜まったら行かなくちゃい
けない所があるから」

「私も言いましたよね？その後でも構わないからって」

「ああ。まあ」

ソフィアの話とはつまり俺を狼月にスカウトすると言う話だ。作
戦参謀として俺と言う人材を必要と判断したのだそうだが――。

「用事が終わったらまた来るから。結論はその時に、な」

「ええ。楽しみにしています」

ニッコリと俺に笑いかけるソフィアは他の意図が見えて、なんと
なく気が気じゃなかったりする。

「それじゃ行つて来る」

「ええ。早く帰つてきてくださいね」

「あゝ。まあ、善処する」

約束の金額が溜まつた事で俺は狼月を後にしエリナを探しに行く事になったのだが――。

「なんだかソフィア殿、師匠様の奥方のようですね」

「き、気にするな」

花輪の言つとおり見送つてくれるソフィアは旦那を送る妻のような言動と微笑を俺に見せてくれたのだった。なんだか非常にいい事をしている気分だ。

「それで目的も無く旅に出る訳ではなからうな？」

「ああ。その辺は抜かりない。ちゃんと狼月でも目的地を調べてきたから」

目的地はクライリンク。一応最初に向かうのは可能性としては低いが俺が落ちた崖の辺りに行つて見ようと思っている。

「ふむ。狼月からはそれほど遠くないな」

「ま。だからそこを最初の目的地にしたんだけどな」

俺は方向音痴なので流瀬に地図を任せて2人のペースに合わせて歩く。

「この分ならそれほど掛からず狼月に帰れそうだな」

「何だ？流瀬も狼月が気に入ってたのか？」

「ま、まあ。居心地は悪くなかったな」

気に入ったのは多分狼月の空気と言うか雰囲気というものだろう。あそこは俺や花輪達にとっては居心地の良い空間だった。

「心配しなくても直ぐ帰れるさ。まあちよつと厄介事を片付けないといけないけどな」

エリナの搜索にエリナへと謝罪、エリナの説得。まあ、主にエリナの事に関する事だが、これが一番厄介だったりする。

「そうだ！色々あつて忘れかけていたが、あれはどういう事だ」

「あん？」

エリナへと謝罪を考えていると唐突に流瀬が俺に突っかかるように抗議し始めて来た。

「我々が受け継いだ奥義書だ。あれを何処にやった？」

「ああ、あれか。あんな物は燃やして捨てちまった」

「「な！？」」

流瀬だけでなく花輪も驚愕していた。だが誰になんとわれようとあんな危険な物を世に残しておく訳には行かない。まして俺の可愛い弟子達はその対象だと言うなら尚更だ。

「心配しなくても、あんな欠陥奥義の代わりに俺が新しい技をお前達に伝授してやる」

「新しい・・・技？」

「で、でも師匠様。花輪の教えでは・・・」

「花輪に技はなし、か？」

花輪流刀術に置いて攻撃とは全てが必殺である為、技と言う物は存在しない。

「まあ折角考えたんだから聞くだけ聞いてみるよ」

俺が奥義を参考にして考えた物を披露すると花輪と流瀬はその目を輝かせ始めた。

「『花輪流刀術・真技』とでも言えば良いかな？その名は・・・」

「そ、その名は？」

「まだ考えていない。どうせだからお前達二人で名前を考えてくれ」そして思惑通り二人の奥義へと関心は完全に真技の方へと移ってくれたようだった。頑張って考えた甲斐があつた。

一週間ほどをかけて歩を進め俺は最初の目的地であるあの崖に辿り着く事に成功していた。

「まあ流石にここに居ると言う事は無いか」

俺は崖下を覗き込みながら少々期待が外れて嘆息する。エリナが

無事である事は確信しているが一年以上もこの場所に留まっているとは考え難い。次は心当たりのある所を探す事になるのだが――。

「野生の猪か？」

背後に感じた領域の感覚に振り返り推測を立てる。

「そのようですね。なにやら興奮しているようです」

「む。私はまだそこまで正確に読み取れん」

それでも流瀬も何か来ると言う事は感じていたのか3人の視線は一方方向に向けられている。そして予想通りに大型の野生の猪が草むらから飛び出してきた。

しかし俺、花輪、流瀬に動揺はない。単純に猪が向かう先が俺だったからだ。二人には信用されているし実際この程度の猪ならば問題にもならない。そう問題にもならない――筈だった。例えば猪が石に躓いて花輪の方へと方向転換するまでは。

「な！？」

即座に反応したのは勿論俺。咄嗟に花輪を突き飛ばして猪の牙の直撃を回避させたのは良かったのだが、その牙は俺の左腕を貫いて尚も猪の勢いは止まらない！

「ち！この馬鹿力が！」

足を地面に突き立てて必死にブレーキを掛ける。このまま行けば後3メートルで停止出来る。だが致命的な問題として背後には2メートルしか地面が無く、その先は崖になっていた。

「あ」

呆気なく落ちる。あの時と同じように俺は崖の底へと真つ逆さまに――。

「って。落ちて溜まるか――」

二度も同じ目に合うのはご免被る！

俺は落下中に猪の牙を左腕から引き抜いて、そのまま猪の頭を抱えて膝を額に叩き込む！

「ぎゃふ！」

猪は情けない悲鳴をあげて絶命し俺はその猪とクルリと反転する
ように場所を入れ替え猪の体を踏み台にして――跳ぶ！

落下途中、勢いを増して落ちていく猪の死体を見送りながら俺は
駆け上がるように崖を上にと登っていった。

エピローグ

流花の事情

「ち」

4人の敵に囲まれ私は少々舌打ちを漏らす。今の所防御に徹している為互角の攻防になっているが4人ともかなりの手練だ。正樹の奴が一人でも打倒出来たのは奇跡と言っても良いほどの。

「正樹。嘘。そんなの、嘘でしょ？」

そして唯一の味方であるエリナは完全に足手纏いになっていた。正樹を失った事で完全に戦意を喪失している。この場は何とか隙を見て撤退したい所なのだが――。

「悪いが逃がさないよ」

少々難しいらしい。

この4人。個々の強さは勿論だが連携が非常に上手く出来ている。多対一を掲げる花輪流刀術の使い手である私としては有利な戦況の筈なのだが相手もまた連携で一人を仕留める事に特化した使い手である為、膠着状態に陥っている。

幸いなのは連中の連携は本来5人を基本として成り立っている事。正樹が一人を倒した為に穴が空いて連携に僅かながら隙が出来ているのだ。その隙を狙って攻撃を仕掛けるが連中もそれは自覚しているらしく今一歩踏み込みが足りない。

「さあ。それじゃ、そろそろ決めさせて貰うよ」

4人の武器は鎖鎌、長剣、二刀短剣、槍の4つ。しかも武器の使い方が巧みでなかなか先を読ませない。

考える。私には絶対に負ける訳には行かない理由があるのだ。

しかし、こちらの思考を遮るように先制の鎖分銅が放たれ――。
「な!？」

崖から飛び出してきた何者かによって、その鎖分銅は弾かれ明後日の方向へと流れていった。一体何者か？それは――。

「無事か？花輪」

「え？」

左手から血を流し右手には銀色の剣を持って立つ勇士。その背中には酷く見覚えがあつた。

「何だ、貴様は！」

4人の注意が私から『その人』に向けられる。そして問答無用に敵と判断したのか私の時と同様に鎖鎌の分銅が放たれ――。

「え？あ・・・げれ！」

分銅を放った使い手が訳も分からず絶命した。

「ビル？一体何・・・が！」

そして仲間の死に動揺した一人が即座に斬り捨てられ――後はもう何も無かつた。動揺した連中は黙って彼に斬り殺されるのを待つだけだったから。

「ふう。二人とも無事・・・かれ？」

その人は私の方を振り返ると何故か奇妙な声を上げ何故かお化けでも見たような顔をして――。

「あれ？あれ？」

再度キョロキョロと辺りを見渡す。その仕草がなんだか猛烈に懐かしく同時に猛烈に――腹立たしかつた！

「今更・・・」

「え？え？」

「今更、どの面下げて私の前に現れた――！！！！」

「げぺ！」

そして、その腹立ちを直接行動に起こし私はそいつの顔面を思い切りグーでぶん殴ってやった。

面白いように吹っ飛んで二転三転とした後――。

「何だ、こりゃ!？」

何事も無かったように立ち上がる彼。

む。相変わらずしぶいと言うかタフな。

「ちょ、とつとま・・・え?何?何で?」

「良いからそこに直れ!貴様には言いたい事が山ほどあるのだ!」

「は、はい」

妙に素直にその場に正座して見せるが許してなどやらない。

「良いか、良く聞け。私が、私達がどんな思いで今日まで生きてきたか貴様に分かるのか!」

「えっと、その、すいません」

「謝るな!」

「ああ。すい・・・いや、その、あゝ」

「だから、だから・・・」

私は両の拳を握り締め、それを――。

「だから!」

それを――。

「置いていかないでください、師匠様」

『花輪流花』は彼の者を抱きしめる為に使った。

霧が晴れると言うのはこの事だろうか?

崖から這い上がり花輪を庇いに出た俺はいつの間にか現れていた4人の敵を排除して振り返ると何故かそこに居たのは流花さんで何故か彼女はお怒りで、そして――今は俺の腕の中で泣き出していた。

だから状況なんて分からないけど、その泣き方と甘え方には覚えがあった。だから何となく分かる。

こいつは『花輪』だと。

「何かなんだかさっぱり訳が分からないけど。まあ良いか」
そんな気楽に物事を構えた俺だったが――。

「何が良いの？」

「――！！！」

その声に全身が凍りつき硬直して――何故か死を覚悟した。

「えっと、その・・・エリナ？」

「何？」

当然、俺を声だけでここまで怯えさせるのは彼女以外に居らず確認するまでもなくエリナだったのだが――。

「えっと。久しぶり？」

「ふん。正樹は私と会うのが久しぶりと感じるくらい長く会ってなかったんだ」

「えっと。俺には何がなんだか・・・」

「大丈夫よ」

そしてエリナはニッコリと笑う。

「お仕置きの後にキチンと説明してあげるから」

俺を断末魔へと導いてくださった。

「じよ、冗談は止める。正樹が師匠様で、師匠様が正樹？」

「だから要するに流花さんの師匠様と言うのは正樹の未来の姿だったのでしょう。正樹はこの崖『時空の痕』と呼ばれる所に落ちて過去・・・10年前へと異動した。そして、そこで幼少の流花さん・・・花輪さんに出会って弟子にしたと言う事です。何か異論はありますか？」

エリナによると、どうやらこの崖――時空の痕は以前から神隠しの多発する事で有名だったらしい。その昔、魔王が付けた痕とかいう話で時空間が歪んでいるとか何とか。

「し、しかし師匠様はそんな名前では・・・」

「あゝ。そういえば花輪って俺の事『名無しさん』とか『師匠様』

とは呼んだけど結局一度も名前で呼ばなかったしな」

「う」

図星なのか花輪はうつむいてそっぽを向いてしまう。

「まあ流花さんは兎も角、花輪さんにとって正樹はあくまで『師匠様』であり他の何者でもなかったのでしょう」

「し、しかし私にはまだ色々納得の行かない事が・・・」

「細部の微調整を直すのなんて私にはどうでも良いんです。重要なのは『私の正樹』が生きて私の元へと戻ってきた事。それが一番重要なんです」

「『私の』正樹？」

心なしか花輪の目が少し釣りあがったような。

「以前の正樹はどうあれ今は私の師匠様だ」

「流花さんの師匠様とは即ち全て私の教育の賜物です」

パリパリと火花を散らす二人。それは兎も角一つ気になっていた事があるのだが――。

「なあ花輪」

「何ですか。今取り込み中なので後にしてください」

「流瀬はどうしたんだ？」

「・・・」

張り詰めていた空気が何故かプツンと切れたような気配。何か取り返しの付かない事をしてしまったような、そんな気が――。

『ご愁傷様』

そんな声が聞こえてきたような気がして兎に角、俺は一目散にその場から逃げ――。

「ぎゃー！」

「GET」

あっさり捕まっpegるぐる巻きにされた上――。

「ちょー！待てー！！」

ちよつと言葉には出来ない責め苦を延々と味合わされる事になったのだった。

エピソード（後書き）

という訳で実はこのお話のメインヒロインは『花輪 流花』でした。
次は恐らく反転・遊戯・リバーズ・ゲーム - の6巻を載せられると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8629o/>

エヌ・オーGIFT

2010年12月4日16時40分発行